

防災シンポジウム第9回（平成31年）

地域の防災力を高めるには

津波古 憲

（国土館大学防災・救急救助総合研究所 助教）



司会

皆さま、こんにちは。

本日（平成31年3月23日）は、お足元の悪い中、ご参加いただき誠にありがとうございます。司会を務めさせていただきます国土館大学防災・救急救助総合研究所助教の津波古と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、防災シンポジウムも9回目となりました。今回のテーマは、「地域の防災力を高めるには」です。東日本大震災、熊本地震、大阪北部地震、北海道胆振東部地震など、全国では大きな地震災害が起きています。首都圏では、首都直下地震が心配されています。大きな地震があるときに、被害を最小限にするために大切なことの一つが、地域の繋がりであります。

国土館大学は、世田谷区の防災力を高めるための取り組みを積極的に行い、年1回行われる「世田谷地域総合防災訓練」を行っています。

また、世田谷区の広域避難場所ともなっています。今回のシンポジウムは、災害の被害を減らすために、地域の繋がりをどうするとよいのか、皆さんと一緒に考えて行きたいと思います。

シンポジウムを始めるにあたって、まず、国土館大学学長 佐藤圭一より、皆さまに、ご挨拶を申し上げます。

佐藤学長、よろしくお願いいたします。

開会挨拶

佐藤 圭一

(国士館大学 学長)

皆さま、こんにちは。国士館大学に、ようこそいらっしゃいました。地域の多くの方にも、このシンポジウムに足を運んでいただいたことに、感謝申し上げます。

最初に国士館大学の歴史について、話をさせていただきます。国士館大学の前身となります、私塾の国士館ですけれども、今から101年前、大正6年に、今の港区麻布に私塾国士館として設立されました。それが起源でございます。その2年後、大正8年に、ここ世田谷の地にやってまいりました。

それはなぜかという、やはり松陰神社です。創立者柴田徳次郎が敬愛してやまない、吉田松陰の精神を、この地において継承するものです。その精神とは、国を思い、世の為、人の為に尽くす人材であります。それが、今101年目を迎えまして、7学部、大学院10研究科に継承されております。

さて、平成ですけれども、1か月少しを残すばかりとなりました。平成という元号は中国の古典からとったものですが、国の内外天地共に平和をなすという意味ですけれども、残念ながら、だいぶ様相はちがっておりました。その一つは何といっても、今、司会者からありましたけれども、地震です。しかも大地震です。昭和に1度たりとも経験しなかった、震度7の地震を平成に入りまして、なんと5度も経験しております。平成7年の阪神・淡路大震災、平成16年の新潟県中部地震、それから、平成23年の東日本大震災、そして、まだまだ続きました。熊本の大地震は、平成28年でした。去年は、北海道の胆振東部地震であります。それはもう、大変な災害でした。

このシンポジウムを主催します防災・救急救助総合研究所は、偶然にも、あの東日本大震災



の直後、2011年（平成23年）の4月1日に創設されました。国士館大学は、国を思い、世の為、人の為に尽くす人材の養成、それが一つの建学の精神であり、継承されるものですが、この防災総研ですが、実に、時代にマッチしたと言いますか、国士館は、確かに伝統がありますが、伝統は、時代に対応しなければ輝きを失うものです。今、国士館は、この防災教育に全力を挙げているところです。

地震だけではありませんでした。思い出します。平成27年には、常総市の鬼怒川の大氾濫もありました。それから、平成28年北九州福岡を中心とした、大水害がありました。そして、去年は、岡山、愛媛を中心とした西日本の大水害もありました。そのたびに未曾有という言葉が使われますが、毎年、毎年が、未曾有なのです。

国士館大学は、平成31年4月から全学部で総合教育科目として、「防災リーダー養成論」を学ぶことになりました。これは何かというと、まず自分の命を守る、そして家族の命を守る、そして地域住民の方の家族の命を守る、これは、

崇高な理念を持った改革であります。

毎年9月になりますと、「防災リーダー養成論実習」を行います。この実習では、1泊3日、ライフラインがない状態での生活も、体験してもらいます。命の尊さを、学ぶわけですから。先ほど紹介がありました訓練ですが、小田急バス、日本赤十字社、そして世田谷信用金庫、若林地区の皆さま、世田谷区の皆さま、梅ヶ丘の皆さまが、連携して、世田谷地域連携防災訓練を行います。これは、本当に真剣に溢れた、臨場感あふれる、危機を体験する見事な訓練です。

この防災・救急救助総合研究所は、先ほど申

し上げましたように、わが大学の精神を継承する貴重な研究所です。この教育理念を継承する研究所が主催する、今日のテーマ「地域の防災力を高めるには」は、防災力を高める適切なテーマだと思います。

昨今の現状、将来の可能性を知る意味で、大変貴重なシンポジウムになることを確信しております。どうか皆さま、よろしくお願いいたします。そして皆さんで助け合って、日々防災を行う事によりまして、地域を守りたいと思います。どうか、よろしくお願いいたします。私からは、以上です。

所長挨拶

島崎 修次

(国土館大学防災・救急救助総合研究所 所長)

皆さま、今日は。防災総研の島崎でございます。

近年、災害が頻発いたしております。特に大規模地震の発生が予想されます。南海トラフ地震、あるいは首都直下型地震が、これから30年の間に75%程度の確率で発生するということが予想されております。かなりこれは、驚異的な予想になろうかと思えます。

このような状況下で、国土館大学は、10年前に防災総研を創設いたしまして、災害に係る科学的な研究、教育、それから実践等総合的取り組みを行って参りました。そして、それを学生に学んでもらい、国土館防災リーダーを養成し、防災士の資格を取得して頂いて、地域防災力を身に付け、実践的な能力を持った学生を、社会人として世に送り出す、ということを全学的な方針として、現在やっております。

そういう中で今回のシンポジウムは、地域の防災力を高める、ということをメインテーマにした大学の方針にぴったりとマッチしたものであらうと思えます。

今回のシンポジウムは、最初に、防災に係る



権威の先生である室崎先生に、地域の防災力を高めるには、という基調講演をしていただきます。その後、パネルディスカッションを行います。地域の防災は、何といたっても安心・安全の暮らしの要となる、セーフティネットで重要なテーマです。

国土館大学が本邦で唯一と考えられる、防災救急に係る研究所を持つ災害拠点大学として今後とも、社会あるいは地域に貢献していきたいと、このように考えております。

本日のシンポジウム、よろしくお願いいたします。

基調講演

地域の防災力を高めるには

—コミュニティの力—

室崎 益輝

(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 科長・教授)



司会

ありがとうございました。それでは、早速、基調講演に移りたいと思います。

災害に関する研究では第一人者である、兵庫県立大学大学院教授 室崎益輝先生に、お願いします。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

室崎

ご紹介いただきました室崎でございます。

よろしく、お願いいたします。

世田谷区は聖地

世田谷区は、防災を研究している者にとっては、聖地です。古くから、街づくりに取り組んでいるところで、私は、太子堂には、何度も通いました。世田谷区役所にも、ずいぶん昔からいろいろ勉強に來させていただきました。この防災の先進地で話をさせて頂くことは、釈迦に説法のような気もしないではないですが、多少

内外の災害現場を見ているので、その経験から、お話しすることができるのではないかと考えています。

今日は、なぜコミュニティが大切で重要か、そして、今どのような時代なのかという話と、平成に入って災害の動向が大きく変わってきているので、そのことに絡んで話をしたいと思います。

これは戦後から現代までの自然災害による死者の数を表したグラフです。今日は、二つのポイントについて、お話をしたいと思います。

阪神・淡路大震災と東日本大震災

一つ目は、阪神・淡路大震災と東日本大震災です。平成に入って、巨大な地震が次々に発生しています。これは、地球のメカニズムが原因です。関東と関西、そして東北で、少しづつ周期はちがいますが、100年から300年の周期で、巨大地震が起きる時代を迎えています。地震が、活動期に入っているからです。

私は関西ですが、関西では、100年から150年の周期で南海トラフ地震が起きています。プレートとプレートの境界でエネルギーが溜って、エネルギーが耐えられなくなり、プレートが跳ね上がり地震は発生します。地球のメカニズムが要因で確実に繰り返し起きています。まさにその時代に入っているので、震度7が何回も繰り返し起きています。こういった巨大地震が、30年以内に南海トラフ地震でも首都直下地震でも70%から80%の確率で起きるということで、巨大地震が起きる時代に入ってきているということです。

風水害による死者の数の推移

二つ目は、自然災害の内、特に風水害による死者の数の推移です。

戦後から、昭和35年の伊勢湾台風まで、1年間に1,500人ほどが、亡くなっていましたが、次の15年間には、頑張って300人まで減らすことができました。さらに次の15年間には、150人ぐらいまで減ってきています。次の10年間は、1年間に100人を割っています。

それは、自然災害に対する対策が進んだ結果です。死者の数が減ってきて楽観していたら、東日本大震災以降、自然災害が全国で次々と起きて、去年は、350人の死者が出ました。

西日本豪雨では、広島土砂災害とか、岡山県の実備町の河川の氾濫で大きな被害が発生して、100人まで減らしてきた死者の数が、ふたたび1年間に、150人、200人、300人と増えてきました。これはとても重要なことだと思います。しばらくは、大きな地震以外の自然災害で、被害が続くと思っています。

これらの巨大災害が起きる時代にどう備えるかが、問われていると同時に、日常的に起きる自然災害で、たくさんの人が命を失う時代に來ています。

この二つの警報に対してどう備えるかが、問われているのだと思っています。

なぜ、このような災害が起きているのか。それは、自然が狂暴化して、災害が、活動期を迎えているからです。地球温暖化の影響で太平洋の温度が上昇しています。

大阪では台風21号の時、風速60メートルの風が吹き、駐車場の車が吹き上げられて倒れました。立派なコンクリートの建物の屋根が、風の風圧で飛ばされる事象も起きました。それはたまたま、台風21号だけかという、決してそうではありません。

現在の気象条件から、大阪では、風速60mの風は、次々と起きるだろうと言われています。今から、地球温暖化対策をしても、すぐには変わらないので、避けることができません。

弱くなったコミュニティの力

もう一方、重要なことがあって、どうして、こんなに災害が起きて被害が出ているかというと、コミュニティの力が、弱くなってきているからです。

私が防災の研究を始めた1968年(昭和43年)の頃は、5割の人が、コミュニティ活動に参加していました。50年前には、5割の人が参加していたのが、今では、1割に減っています。

コミュニティ活動に参加する人が、年々徐々に、減ってきています。自治会に入らない人も、当たり前のようにになりました。地域のコミュニティが、弱くなってきているということです。

比率が増加した一人暮らし世帯

もう一つ私が着目しているのは、一人暮らしの世帯の比率が増加していることです。これは、2000年(平成12年)のデータですが、大都市では、3割以上、3世帯に1世帯は、一人暮らしの生活が生まれています。

リズムがある地震火山、風水害、人為災害

災害には、リズムがあります。巨大地震のような、地震火山のリズムと、風水害のリズムと、もう一つは、お風呂での溺死、交通事故など、社会的な人為災害のリズムがあり、その3つに、それぞれリズムがあります。

阪神・淡路大震災が発生する前、私は、お風呂の溺死事故を調べていました。その時、1年間に、お風呂でおぼれて死んだ人は、1,500人ほどでした。現在、お風呂で死ぬ人は、4,000人を超えています。マンションは階段の関係で、昔の五右衛門風呂のような縦型のお風呂が作れなくなりました。なので、横長のお風呂が原因で溺死が増えたと考えたのです。しかし、お風呂の形態と溺死は、関係がありませんでした。

何が関係したか。一人暮らしが増える率とお風呂で死ぬ率は、比例することが、解りました。お風呂の中に、頭を浸けてみるとよくわかるのですが、お風呂に入っとうたた寝をすると、水はとても重くて、元気な人でも頭を浸けると、

体制を戻すことができません。その時、わめいたり、叫んだり、救いを求めても、家族がいないので助けることができません。

例えば、お爺ちゃんがお風呂に入って、30分も出てこない場合、お孫さんに、様子を見てきて、と言えるのですが、家族が一人だと誰も助けに来てはくれません。

家族内の助け合いの力が、非常に衰えているからです。

それと同様に、コミュニティによる助け合いの仕組みが、非常に弱くなっています。少子高齢化が拍車をかけているからです。

BN比、3と1

我々は、地域の人口構成のディスクを調べるのに、BN比を使います。Bは、ベットといい、65歳以上の人口と、10歳以下の人口を足したものをBベットと言います。助けのいる人達です。今は、75歳でも元気です。

そして、Nは、ナースで助ける人という意味です。助ける人と、助けられる人の比率がどうか。普通の学校だとか、保育所だとか、病院は、BバイNが、3を超えると助けることができます。

保育園の先生が、背中に子どもを背負って、両脇に子供を二人抱えて逃げる、3人までは逃げられますが、個々の施設もそうですが、地域でどうか。BバイNが、1を超えともうだめです。現実には、1を超えようとしています。65歳以上の人口と、赤ちゃんの人数を生産人口で割ると、1を超えということは、高齢化が進んでいるということです。

これをどうするかは一つの大きな問題点です。

見事に小学生が出来る

最近では、65歳でも70歳でも、80歳でも元気です。普通だったら、ベットに行く人が、ナースに代わることになります。年齢が下の方に行くと、微妙です。小学校の何年生ぐらいから、助ける側に移れるかです。

埼玉県の幸手市の吉田小学校では、避難訓練で、4年生、5年生、6年生が避難者になると、お風呂を作って、ドラム缶でお風呂を沸かして、そしてカレーライスを作って、部屋割りまでします。見事に小学生が、出来ます。

これでいいのかという議論はありますが、少なくとも、中学生はものすごく力になります。

BとNの比率を変える取り組み

もう一つは、今まで助けられる側と思っていた若い人たちを強くして、BとNの比率を変える取り組みをすることです。

だけど、それはかならずしも、正攻法ではありません。

どうするかというと、地域のコミュニティの質を高め、弱いコミュニティを、もう一度強いコミュニティに作り変えることが、大きなポイントになると思っています。

弱いコミュニティを強いコミュニティに変える話は、次になります。

弱いコミュニティを強いコミュニティに変える

今、我々は、災害の時代だといったときに、注目するのは、自然の猛威や激しさだけではなく、コミュニティが急速に弱くなってきている社会を、どう変えていくか。これが、問われています。

戦前の隣組のような監視型のコミュニティではなく、戦前とは違う新しいコミュニティをどう作るかが問われていると思っています。

コミュニティの新しいあり方

過去の阪神・淡路大震災とか、東日本大震災とか、西日本豪雨なども、参考になります。

そういう経験から、新しいコミュニティの大切さを話したいと思います。

西日本豪雨などの場合、避難勧告、避難指示が出ると、みんな逃げなければなりません。避難勧告、避難指示が出て、岡山、広島の人達が、何人逃げたのか。そのデータが、たくさん出ています。

結論から言うと、100人に1人も逃げていません。NHKも、細やかに、朝から晩まで、台風が来て、大雨が降っているので大変なことが起きると、呼びかけますが、逃げない状況が起きます。

結果として、岡山の実備などは、亡くなった人の8割が、65歳以上の高齢者で、その8割の人が、家の二階にも上らずに亡くなっています。

それはそれで、問題があって、どうしてそのようなことが起きるのかです。

重要なことは、スマホとか、エリアメールは確かに有効です。しかし、自己責任にまかせるので限界があります。逃げるようにするには、被害をしっかりと理解できる力を身に付けることです。

ビルの避難などの研究でいうと、大きな災害が起きると、人間は、小学校4年生以下の知力に戻ります。だから、高齢者避難準備情報とか、レベル4、レベル5と聞いても、逃げるのができないのです。非常事態になった時には、記憶が引き出されないため、思い出せないのです。

極論を言います。

後ろに、避難口の図がありましたけれど、我々が防災の研究を始めた時、「非常口」と漢字で書いてある「非常口」の字が、読めないことが分かりました。

功を奏するか不明な災害情報。一方で、全員が助かった事例

災害情報も、災害が起きた時には、人間の判断する能力が弱くなるので、一方的に与えられても、功を奏するかどうか、よくわかりません。

岡山県の実備町とか、愛媛県の西予市や、その前の北九州豪雨の日田市や東峰村などでは、全員助かっている地域があります。

どうしたかという、自治会長と一緒に逃げましょうとか、消防団員が車を差し向けて、この車に乗ってくださいといって逃げたとか、コミュニティ避難と言って、地域のコミュニティの人達が一緒に逃げようと声をかけたところ

は、ほぼ全員が助かっています。

一面的に言い過ぎると困るのですが、ハイテクなSNSのシステムと、コミュニティを支えるシステムを活用することによって、効果がでてきます。

地域の連携と近代的な道具

北九州豪雨の東峰村では、毎日、田んぼの田棚を見ているので、水があふれ出て、いつもと違うと異変を感じ、ただそれだけで逃げろと指示をして、避難指示や避難勧告が出る前に逃げました。

地域の観察力と連携力、そこに新しい近代的なSNS、エリアメールなどのハイテクの道具が加わった時、人は助けられます。

大嫌いな、津波てんでんこ

私は、教科書に載っているので否定はしません。

しかし、津波てんでんこは、大嫌いです。

お年寄りや赤ちゃんに、てんでに逃げろと言っても、逃げることはできません。

みんなで避難することが、重要です。

ハイテク+コミュニティ

確実に助かる方法は何かという、ハイテク、プラス、コミュニティです。昔のコミュニティと違った新しいコミュニティに、科学の力を足すことによって、コミュニティが生きて来ます。

西日本豪雨被害は、弱いコミュニティは、人を助けられないということを、我々に教えてくれました。

阪神・淡路大震災の時に、誰が助けたのか。

多くのデータが、出ています。

私は、警察、消防、自衛隊は、17%しか助けでなくて、自力で助かった人は、3割、家族が助けたのが、3割、友人・隣人が、2割少しだと考えています。

結論は、公助には限界があり、助けたのは、地域のコミュニティの人だとか、家族でした。

これは、間違いありません。まさに、レスポンスタイムになった時に、すぐに助けられるのは誰かということになるわけです。

重要なコミュニティの力

火事も同じで、レスポンスタイムで10分から20分ぐらいは、コミュニティの力で頑張ることが出来ます。

東京の人は、バケツリレーが好きで頼ってもらえるかもしれませんが、家が壊れて、閉じ込められると、バケツリレーに参加したくても、参加できません。

阪神・淡路大震災の時に、神戸の人は、バケツリレーができませんでした。神戸の人は、防災意識が低いからと、東京の人に叱られました。

それはちがって、家の下敷きになっているため、バケツリレーに参加できなかったのです。バケツリレーは、コミュニティの力がとても重要です。

火事を消すのは、最初の10分から20分が、コミュニティで、消すことができます。

生き埋めになった人も、いろいろなデータがあって、最初の1時間から数時間まで生きている可能性があります。

その時助けられる人は、誰かということ、コミュニティなので、阪神・淡路大震災の時も、結論は、コミュニティだということです。

復興がうまくいったところ、そうでないところ

それでは、東日本大震災の時はどうか、という話があって、東日本大震災は、復興がうまくいったところと、うまくいっていないところがあります。

うまくいったところは、釜石の花露辺（けろべ）とか、岩手の棚畑村だとか、宮城県の岩熊市です。

復興がなぜ速いかということ、コミュニティが、みんなで平日頃から議論しているからです。宮城県は、応急対応でも、復興でも、みんなで議論しているから、被害を少なくし、復興も早まります。みんなで議論することが、重要です。

共助でカバーするしかない想定外だとか、未曾有とか

特に巨大な災害が起きた時、公助である行政の力には、限界があるので、行政が助けに来てくれない時にどうするのか。その時には、共助の世界しかありません。

共助の世界は、無限大で、世界中からお金が集まってくることがあります。

東日本大震災の時、どこの国がお金をくれたかということ、台湾です。アメリカに匹敵するぐらいのお金をくれました。

そういう意味でいうと、共助の世界の可能性は、とても大きいと思っていて、従来、自助対、共助対、公助は、7対2対1対の原則がありますが、これも大嫌いで、間違っていると思っています。

私は、こう思います。「5対、無限大対、5」の原則があって、公助はフィフティで、自助もフィフティです。

フィフティ、フィフティで、自助、公助、それぞれが、責任を果たさないとはいけません。

無限大の可能性ある共助

そして、真ん中の共助が、無限大で可能性があるあるので、この無限大の共助の力を、どう豊かにしていくか。行政は、行政で責任を果たす必要があります。

行政は、力がなくて助けに行けません、と言わないで、やれることはやる。そして、自助も、自分たちで出来ることは、自己責任でやる。

真ん中の共助と。そこの両方の自助、公助が、いくら頑張っても、対応できないのが、大規模災害の特徴なのです。

想定外だとか、未曾有だとか、そういうところは、共助の力で、カバーするしかありません。

コミュニティが重要な地域の防災力

まさに、地域の防災力は、コミュニティが、とても重要であると思います。

地域防災は、地域でしかできないこと、地域でしなければならないことを、みんなの力を合

わせてするところだと思っています。

熊本地震の時、西原村の川原小学校の避難所では、1日目から、ご馳走が出ました。別の小学校では、1か月間、冷たいおにぎりしか出てこなかったところがあります。

西日本豪雨でも困ったのですが、被災者が野菜を食べたいとか、果物を食べたいと言われるので、我々は、広島の中卸売市場に行って、野菜やトマトを買ってきて、避難所の人に配ろうとしました。

すると行政は、中毒になるのでそんなことはしないでくださいと、ストップがかかりました。

避難している人たちの食事が、菓子パンと、近くの料理屋さんの同じお弁当で、夜はインスタントラーメンの生活を1カ月続けると、体調を悪くします。

料理は、コミュニティのみんなで協力して作る方が良いのです。畑から大根を取ってくるとか、材料を持ち寄るとか、みんなで調理する方が良いわけです。

それを、川原小学校ではやりました。

料理を出すときに、おばあちゃんは、歯が悪くから、硬いものはだめだとか、この赤ちゃんは、アレルギー体質なので、アレルギーになる食事を出してはいけないとか、一人一人の特徴とか、好みとか、健康を考えて料理を出すことが、必要になってきます。

仮設住宅には、大家族の人達もいるし、一人暮らしの人もある。広さは、28㎡で6畳と4畳半と台所です。

行政は、同じ間取りの部屋を提供するのは、得意です。しかし、大家族なので、40㎡にしようとか、家族が少ないので、20㎡でいいとか、そういう配慮は、行政はできません。

コミュニティや、ボランティアにしか出来ないこと

一律に、きれいな言葉でいうと、公平にやる、画一的にやるのは、行政は、得意です。

それぞれの家族の状況とか、地域の状況とか、細やかに対応できるのは、コミュニティや

ボランティアにしかできません。

我々は、アムエットミューズといって、不確実なニーズに対して対応することは、行政は得意で絶対にできません。それを、行政に求めるよりは、自分たちでやるほうがずっと良いわけです。

例えば、小学校を一律に避難所に決め、災害が発生した時に、みんな小学校に逃げろというのは、行政は得意です。

でも、地域のいろいろなリスクを見て、津波が来る危険性があるとか、裏山が潰れる危険性があるとか、さまざまな状況に応じて対応する必要があります。

一律に小学校を避難所にするのではなくて、地域の状況に応じて避難所を決めることが、重要だと思います。

例えば、高齢者が多い家族は、小学校まで30分以上かかるので、避難所には行くことができません。

そういった場合は、公民館を使うとか、家においでおいでといって避難所にするとか、安全な個人の大きなお宅を避難所にするとかを、考える必要があります。

地域によっては、遠距離避難をやめて、10分以内に避難できるところに避難所を設けるとか、細やかな避難所計画を、コミュニティで考え、実行することが一番です。

すぐに対応できる能力に優れたコミュニティの力

まさに、コミュニティの特性とは何かというと、すぐに対応できる能力です。

火事が起きても、小さな火事だとコップ一杯の水で消すことができます。10分以内に消すと、公的な消防機関は、必要ありません。

地域の状況に応じて、地域が力を合わせて、自分たちでルールを決めて、地域のコミュニティでしかできない特性を生かしながら、防災を進めていくことが、コミュニティの強さです。

行政の尻拭いをするコミュニティではなく、コミュニティは、コミュニティの特性を生かして、コミュニティでしかできない新しい取り組みを

することが、防災力を高めることになります。

先ほども申しましたように、避難所の食事は、コミュニティで事前に話し合って1週間分の献立を作っておくとか、1日目から、暖かい食事を摂ることができるようにするとか、それをするためには、どうしたらいいかを、是非コミュニティで話し合って実行してほしいと思います。

赤い紙を貼るボランティアの判定士

最近、社会では、地区防災計画を作る動きが、始まっています。地域の地区ごとで防災計画を作る必要があります。地震は、震度7が2回起きることもあるし、余震も起きます。大雨が降って裏山が崩れるかもしれないし、自分の家に戻ると、また災害に合うので、危険な家に入らないでくださいと、応急危険度判定士は、張り紙をするわけです。

ボランティアの判定士は、安全を考える。そこで、迂闊に緑を貼ると、次の災害で死なれると、責任をとらされるので、赤を貼ります。

熊本地震では、8割の被災家屋が、赤い紙を貼られました。

赤い紙を貼られると行くところがないので、避難所に行きます。避難所の面積は——世田谷区はどういう計算をしているかわかりませんが、世田谷区にも世田谷区のシステムがあると思いますが——、概ね、その地区の世帯数の3割、地震でいうと全壊の3割、3割の人が避難所に行きます。その3割の人口にかける、たいていのところは、1.5とか2.0をかけると、体育館の面積になります。それで、体育館を避難所にする訳です。

3割の人が、避難所に来て、1.5㎡あるので、雑魚寝状態ですが、何とか入ります。

8割の人が来たら、入れないのでしかたなく、車中泊をします。

そういう時に、避難所避難だけではなくて、近くの安全な家を避難所にするとか、自分の家で在宅避難をするとか、避難できる仕組みが作れないか、コミュニティで考える。

「おいでおいで、避難」

先ほどの、近くの家に避難することを、「おいでおいで、避難」といって、遠い小学校に行かなくても、避難ができます。

その代り冷蔵庫から1品持ってきて、あなたはお味噌持ってきてとか、地域のコミュニティで、事前に役割を決めておきます。

このいいところは、コミュニティの特徴の中で、自立性ということを使ったのですが、お味噌が担当の人は、お味噌を持って逃げないといけないので、必ずお味噌を持って逃げます。

みんなで決めたことなので、私が持っていけないと、味噌汁はできないので味噌を持ってきます。大根係だと、必ず大根を持ってきます。

自分たちで自発的に決めたことは、みんなで守ります。

これは、コミュニティで重要なことです。

行政が作った計画は、俺は勝手にやるとか、従わない人が、たくさん出てきます。

コミュニティの防災、地域の防災

最初にハイテクの話をしました。新しいコミュニティを考えた時、マンションは昔、防災が遅れていました。マンションは、人付き合いが嫌な人、プライバシーが嫌で閉じこもる人、マンションに好んで入った人も、地域の自治会には、誰も入らない状況で、一番防災で遅れていた部分でした。

でも、今は違います。東京で進んでいる防災は、マンションです。

マンションにいる人は、みんな利害関係は一緒なので、災害対応を考えだすと、フロアごとにどうするか、備蓄はどうするか、マンションはすぐまとまります。

マンションと地域も、一緒にならないといけませんが、マンションと一戸建て住宅、とてもむづかしいので、必ずしも町内とかに、こだわらない状況になります。

それぞれがもっと自由に決めたらいいという、動きもあります。それ以外に、先ほどの、BとNの考え方で、Nを増やす話ですが、住

んでいる人は、高齢化しているので、住む人だけのコミュニティの発想も、支え切れなくて、そこに働いている人だとか、そこにたまたま、交流人口、色んな人、一つのグループとして、いわゆる自治会というレベルのコミュニティの考え方ではなく、地域防災協議会とか、いろいろな地域の団体が一緒になって進めていくことも大事だと思います。

大学の使命

横浜市の瀬谷区では、市民団体や、福祉事務所、小さなグループ訪問団などの関係者が自治会と一緒に、防災訓練や助け合いをするなど、大きく変わってきています。

そして、地域の民生委員や消防団員など、多くの人が防災グループとして、協議会を作って、それぞれの役割分担を決めて活動しています。

そうすると小学校が避難所を開設した時、初動期の運営は、防災士会がやりますとか、決めて行けるわけです。

防災士の資格ですが、国士舘大学の学生も、防災士の資格を取っていただくことは、とても大きいことです。学生も、大学も、地域コミュニティの一員として一体となることが、とても重要です。

昔、関西大学にいた時、近くに大きなニュータウンがあって、平常時には、学生が体育館で、小学生と防災ゲームなどをしていました。

実際に、災害が起きた時、学生は、すぐに自分の家には帰れないので、全員がニュータウンに行って、部屋の中にお年寄りが倒れていないか、一軒一軒、見回りながら救助をすることを大学でやりなさいといっていました。

それは、大学の使命としてすべきだと思っています。

塀がない国士舘大学

今日、国士舘大学に来て感動したことがあります。それは塀がないことです。

塀がないということは、誰が入ってきてもいいし、地域の方が避難をしてきたら、拒否する

かどうかは、すごく重要なことです。

東日本大震災の時、某国立大学は、地域の方が避難して来ましたが、全部排除しました。

阪神・淡路大震災の時、私がいた神戸大学では、排除したかったのですが、塀がなく勝手に入って来られて、教授会は、半年間絨毯の部屋で出来なくて、寒い教室で、教授会をしました。

どちらがいいかという話です。

大学は、地域に対して何を果たすべきか。大学は、立派なスペースを持っているので、被災された方に、解放しないといけないと思っています。

ポカリスエットの大塚製薬

大塚製薬は、ポカリスエットを作っているところ。災害の時、ポカリスエットはよく売れるので、当然、大塚製薬は、地域に貢献しないといけないので、徳島の大塚製薬の工場は、地域住民に会議室や部屋を全部開放します。

地域住民の食事は、1週間分、大塚製薬が用意しますとか、そういった企業も、たまにはあります。

全ての企業に、そうしろと言ったら困る企業もありますが、一緒に議論をしていると、それはうちでやりますとか、うちにも食料があるので使ってくださいとか、企業は言い始めます。

必要なコミュニティ強化

地域に存在しているあらゆる企業や住民が、地域の防災を考えることが、重要です。従来の住んでいる人達のコミュニティだけではなく、新しいコミュニティを作って、コミュニティを強化することが必要になってきていると思っています。

本当は、ここからが本番だったのですが、地域には、郵便局とかコンビニとか、学校とか、さまざまな組織があります。郵便局は、職員に、「防災士」の資格を取得させ、地域に貢献していこうという動きがすごく強いし、コンビニには、若い人がいます。若い店員さんがいるコンビニや、学校、消防団、防災士会とか、地域の

いろいろな組織が、どうやって連携するかが、とても重要です。

カラオケがうまい人。ストレスと疲労

そして、組織だけではなく、個人にも素晴らしい人がいて、カラオケがうまい人、アマチュア無線ができる人、交通公社に努めている人、様々な人が、地域には、います。たとえば、カラオケのうまい人は、何の役に立つのかと思うでしょう。

避難所を開いたら、週1回カラオケ大会をやるのです。

みんなが、ものすごく元気になります。不謹慎だという人がいますが、絶対に違います。カラオケ大会も、みんなで歌を歌って元気づけることが必要です。

1か月以上、避難所生活を続けると、疲れてストレスがたまります。疲れた体を癒すために、交通公社の人には、2週間に1回の温泉旅行を計画してくださいとか、旅館の手配と切符の手配は、JTBのお父さんにして頂くとかができます。

地域には、いろいろな人がたくさんいます。声のでかい人とか、そういった人たちの特徴を活かして役割を与えることも大切です。私も、年に2回町内会の防災講演を頼まれてやっています。

地域の中にあるものを発見して、地域の力を活かしていくことが、すごい力になります。地域の能力をどうやって引き出していくかが、とても重要です。

地域の人間関係が究極

これからの在り方を考えた時、人間の足し算と、時間の足し算があって、コミュニティの役割は、災害が起きた時に助けに行くとか、復興の議論をするとか、コミュニティに焦点を当てたのですが、実際には、災害が起きる前に、強いコミュニティを創ることが、とても重要です。

こういった準備を事前にはしておかないと、いけないと思っています。

究極は何かというと、地域の人間関係だと、付き合いができる環境を作っておくことが、とても重要だと思っています。喧嘩するのは、いいのですが、いざといったときに仲良くできる関係を作ることが大切で、家庭でも、そうだと思います。

阪神・淡路大震災で、僕の友人は、二人離婚したのがいます。僕は、かろうじて離婚は免れています。僕は、全く家に帰らなかったのも、危なかったと思います。

逃げた、背中を足で踏んづけて。離婚？

女性の方に、言っておきます。

男性にも、気の弱い人がいるのです。地震は、誰しも怖いので、先に逃げたのです。

お嬢さんの背中を、足で踏んづけて、逃げたんです。これで離婚です。

地震が悪いと愚痴を言っていますが、先に逃げたから、離婚したわけではありません。

停年になって家でごろごろしていて、家の家事も、手伝わないし、土曜、日曜日になると、ゴルフに行くし、奥さんは、日ごろから、こいつ何の価値もないと、怒っていたのです。

実際は、家庭の人間関係が、うまく出来てなかったから、離婚されたのです。

確かな普段の繋がり

復興が、うまくいかないのも、普段の繋がりが、しっかりと出来ていないからなのです。

大学と地域の関係も、同じです。災害が起きてからでは、遅いので、普段から、大学と地域の人が、一緒になって何かをすることが、大切です。

先ほど、国士舘大学は、地域の方と、一緒に防災訓練をしていると伺いました。国士舘大学は進んでいます。そして訓練もそうですが、イベントだとか、音楽会だとか、常日頃から一体となってやっていると、災害が起きた時は、うまく動くことができません。災害が起きる前の対応を、どう考えて行かか、要求されていると思います。

コミュニティ力とは、人づくり

最後に、具体的にコミュニティで今まで言ってきたことに関わりますが、少し課題を整理しますと、一番重要なのは人づくりです。

コミュニティ力とは何かというと、一人でも多く災害に強い人を作ることです。

先ほど、お年寄りが元気になるとか、若い人たちにも力を貸してもらう話をしました。そういうこととも、関連するのですが、超高齢化社会が、どんどん進んでいくと、コミュニティ活動をやれと言っても、お年寄りしかないないので、うまくいきません。

では、どうすれば、いいのか。

それは、一人一人の人間を変えていくことだと、思っています。

私も、おなかが出ていますが、医者からラーメンなどのでんぷん質はやめた方がいいと言われるのですが、止めることができません。

これまで、70年間、通してきた食生活は、なかなか止めることができません。私は、食生活が貧しい時に生まれたので、おいしい食べ物には目がないのです。この癖は、いくら説教を受けても、改善することは、出来ません。

防災意識も、そうです。

子供の頃、寝る前に、明日の朝、着ていく服を枕元に置いておきなさいと、いつも母に言われていました。

これは、とても重要で、空襲を受けた経験から、すぐに非難するための習慣です。

真夜中に、起きた時、すぐ逃げるためには、枕元に衣服を置いておくことが、逃げるためには、必要です。

親は、封建的で、面倒なことを言うなあと、文句言っていたのですが、避難するには、とても、重要なことです。

整理整頓をするとか、家の中を片付けるとか、そういうことは、絶対すぐには出来ませんが、災害に対応する習慣が、身につきます。

そういう意味では、教育で人間は変わるのだということです。

最初に言った、避難所に逃げない話もそう

で、どうして逃げないのかと言うと、いままできた津波は大したことがなかったとか、大きな堤防があるから大丈夫だとか、魔物は人間の心の中に住んでいるので、それを変えていく力は、どこにあるかということです。

私は、最近まで、学校の先生の責任にしていますが、家庭教育は、役に立ちません。生活文化が、変わっているので、昔の躰では、うまくいきません。

地域教育というか、地域の防災訓練だとか、地域の街歩きだとか、地域の教育力を見直すことができないか、考えています。

コミュニティでしか出来ない3つ

我々が考えている地域の防災訓練をよくするコツは、3つあって、一つは、おいしい食事を出すこと、二つ目は、楽しみながら、訓練をすること、そして三つ目は、気の利いた解説やエピソードなどを付け加え、関心を持たせながら訓練をすることです。

参加した人たちが、勉強になったと思っていたことが、とても大切です。

体だけ使う訓練だと嫌がるので、気の利いたエピソードだとか、解説だとか、食べ物だとか、楽しさを訓練の中に取り入れることがとても重要で、そういった工夫は、コミュニティでしか出来ません。

地域教育の中に、災害の文化とか、地域の歴史・文化などをどう取り入れて、地域の教育を強化することは出来無いかと思っています。

重要なお祭り

地域の中の、暮らしの文化みたいなもの、お祭りなども、重要です。

ここは、松陰神社などがあるので、お祭りを盛んにしていかないとだめです。

東北には、寅舞だとか、獅子舞だとか、神楽などがあるので、その影響で、コミュニティの力が、強くなっています。

コミュニティが強いから、災害に対する対応力も強くなります。

防災の原点、地域のために働く気持ち

防災教育の話しをすると、よく問われるのが防災教育は何を教えると良いのかです。それで、その時には、地域の文化の素晴らしさや、地域の歴史などを教えてあげて下さいと言います。

地域の良さを理解してもらわないと、若者は、みんな東京に行ってしまいます。

若い人たちに、地域に残ってもらわないと、過疎化が進むのでうまくいきません。地域のために働く気持ちが、防災の原点だと思います。防災のテクニックなどノウハウから入るのではなくて、いかに自分の地域が素晴らしいかという教育を防災教育の中できちっとする。

町の中を歩いて、歴史だとか、そういうもので、自分たちの町が良いか、そういう中に、生活文化だとか、ライフスタイルだとか、細かく言うと、ライフスタイルに行くのですが、ごみの処分の仕方だとか、そういったことを含めて、地域の中に、防災につながる慣習は難しいのですが、ルールづくりみたいなものをしていかないと、うまくいかないと思っています。

仕組み作りは、あんしんネットワークのように地域協議会が、人と人との繋がりをどういう形で作っていくか、言うは易く、行なうは難しく、うまくいかないために皆さん困っていると思っています。

組織の体制をどう作っていくのか。組織間の繋がりをどう作るのか。安否確認の体制づくりをどうするか、それぞれ必要だと思っています。

少し、コミュニティの中の仕組みを変えていくことが、求められていると思います。

地域の防災力は何かということ、ソフトウェアと、ヒューマンウェアと、そして、ハードウェアです。先ほど、時間の足し算と、人間の足し算の話しをしましたが、もうひとつ手段の足し算があります。いろいろな対策を考えることです。

ハードウェア、ソフトウェア、ヒューマンウェア、3つの手段の足し算

手段の足し算でいうと、ハードウェア、ソフ

トウェア、それとヒューマンウェアの3つを足さないといけないのです。ヒューマンウェアは、教育です。教育も、家庭や、学校に任せるのではなくて、地域自身で、人を強くする仕組みをつくることです。つまり、ヒューマンウェアです。

ソフトウェアは、自主防災組織をすることや、応急対応マニュアルとか、情報のシステムをどうするかを考えることです。自主防災組織をどうするかというと、人間でいうと、体質を変えていくことです。

それ以前に、健康な体をつくることが、とても重要です。健康な体は何かと言うと、住宅でいうと、耐震化を図ることや、家具の転倒防止をすること、火災警報器を設置することです。世田谷区では、火災警報器は、100%近く設置されていると思いますが、家具の転倒防止はできていません。

どちらも一緒だと思いますが、転倒防止はできていません。

火災警報器はなぜ出来るかということ、消防団や、女性防災奉仕団などが、頑張るからです。少し、お金がかかるかもしれませんが、家具の転倒防止も、消防団とか、女性防災奉仕団が、頑張れば良いと思うのです。

火災警報器は、お年寄りが付けるには大変なので、付けてあげないといけません。

家具の転倒防止は、体を動かさないといけないので、手間がかかるため、意外と進まないのが現状です。

地震の時は、家具の転倒で死ぬ人がとても多いので、地域ぐるみで住宅の安全管理だとか、感震ブレーカーの設置だとか、ハード面をきちんとしておく必要があります。

これも、多分行政には出来ないと思っています。火災警報器も、行政ではなく、消防団だとか、地域のコミュニティの力で、設置されております。

家具の転倒防止だとか、感震ブレーカーの設置なども、コミュニティでしかできないと思っています。

さすが、中学生

この前、徳島県で、中学生とワークショップをしました。

これからの30年間に、地震が起きた時、中学生は二人で、8人のお年寄りを連れて逃げないといけないのですが、今なら二人で、5人をリヤカーに乗せて、10分以内に高台に運ぶことができます。

だけど、8人では、どう考えても重くて、リヤカーに乗せて運ぶことはできません。

その時、中学生は、さすがです。僕たちに、運転免許をください、そうすれば、ワゴン車に8人を乗せて運ぶことができると言いました。そのうちに、中学生はどう言ったかという、東京に就職するのを止めると言いました。

若い人たちを地域に留めるためには、地域で出来る仕事を増やす必要があります。

そして、若い人たちに、リヤカーによる搬送法だとか、お年寄りを運ぶためのおんぶ紐だとか、ハイテクを使って安否確認のシステムなどを考えてもらうと、地域の防災力も高めることができます。

地域の中に、そういうことを考える人を作り、安全のためのシステムだとか、情報のシステムだとか、避難所に行くための輸送手段のシステムだとかを考えていただくことができるのが良いのです。

究極は燃えない家を創り、壊れない町を創ることで、それぞれが繋がっていくわけで、最後は、ハードの側面も含めてやらないといけないと思っています。

皮が無いと食べられないソフトクリーム——
最中（もなか）の理論

昔、防災は最中の理論と言っていました。とらやの最中は、あんこがおいしいから皮が薄いのですが、駄菓子屋の最中は、あんこがまずいから皮が厚いのです。帝国ホテルのソフトクリームと、ローソンのソフトクリームは、どこが違うかというところ一緒です。

クリームがいいか、悪いか。皮が厚いか、薄

いか。一緒なのです。重要なことは、皮が無かったら、ソフトクリームは、食べられません。

どういうことを言っているかというと、ダムとか堤防は、必要以上に大きくする必要はありません。しかし、ダムや堤防は、無いといけないわけです。

女性のお化粧もそうで、お化粧もしないといけません。重要なことは、きれいな心を持っていることです。

地域のコミュニティである、あんこの部分と、
防災

行政は、道路を広げることばかりするのですが、そうではなくて、家の前は、何時も打ち水がしてあって、朝は、みんなが挨拶をする、ブロック塀が完全になくなっているとか、そういった、地域のコミュニティのあんこの部分をよくすることが、防災には、とても重要です。

地域ぐるみで挨拶をするとか、生け垣に変えるとか、家の前には、きれいな花があるとか、そういう社会を作ることが、防災に繋がります。

それは、地域のコミュニティにしかできません。なので、あんこの部分をよくするコミュニティを創らないといけないのです。

先決のコミュニティの強硬化

国は、国土の強硬化と言っています。

しかし、コミュニティの強硬化が、先だと思っています。

コミュニティの強硬化を図り、もっとコミュニティの地域づくりの良さを出して、素敵なコミュニティを作れば、結果的に、防災力向上に繋がる。

コミュニティを強くする仕組みを作ることが、重要です。

コミュニティをよくすれば、地域の防災力を高めることに、繋がります。

ご清聴、どうも、ありがとうございました。

発表

災害ボランティア活動を体験して 教職員の立場から

浅倉 大地

(国土館大学防災・救急救助総合研究所 職員)



司会

山崎先生、ありがとうございました。

続きまして、本学の学生、職員が、災害ボランティア活動や、防災教育を体験してというテーマで発表をして頂きます。

最初に、防災総研職員の浅倉大地が、発表します。

よろしく、お願いします。

浅倉

本日は、「災害ボランティア活動を体験して」というテーマで、教職員の立場からお話させて頂きたいと思います。

よろしく、お願い致します。

最初に、簡単に、自己紹介をさせて頂きます。

私は、国土館大学の体育学部体育学科出身で、学生時代は、野外教育を専門にしていました。野外教育は、海や川などの自然のフィールドの中で子ども達を対象に、教育的なプログラムを提供するもので、そこで、基礎的なキャン

プ技術を培ってきたのですが、そのことが私と災害ボランティアの出会いのきっかけになりました。

それは、2011年（平成23年）の東日本大震災の支援活動です。

東日本大震災の支援では、石巻専修大学で、テント生活をしながら、一か月間滞在しました。大学のボランティア派遣のプログラムの一つとして、参加する学生の生活管理と、ボランティア作業の管理をしていました。

これは、当時の写真になります。道路に車が放置されていたり、瓦礫の山になっている状況の中で、一か月間の作業を行いました。

その後、大学院を卒業しまして、沖縄の離島に移住をしました。そこで、小中学生を対象に、離島留学制度を立ち上げ、4年間現地で勤めました。そして、昨年3月に退職して、東京に戻って、今年度より、当研究所で勤務をしています。

当研究所の災害ボランティア活動

それでは、当研究所の災害ボランティア活動を、簡単にご紹介させていただきます。

当研究所では、2011年の東日本大震災以降、今年度まで計14回、延べ581名の学生を災害派遣しています。

今年度は特に、災害が多い年でしたので、3回災害ボランティア活動を行いました。参加学生は、合計76名でした。

まず、1回目は、島根県西部地震で島根県大田市に行きました。この時、学生は14名参加しています。活動内容は、地震の被害なので、瓦礫の撤去とか、屋根瓦が外れてしまっている、その上にブルーシートをかけたたりする作

業が主になりました。

2回目は、西日本豪雨で愛媛県西予市、大洲市に行きました。この時は、学生37名ですが、丁度、春期の「防災リーダー養成論」の授業が終わり、いろいろな学部の子の防災意識が高まったので、多くの学生が参加してくれました。

この時は、水害でしたので、お家の中まで水が浸かってしまっている、家の中を片づけたり、床を剥いだり、等の活動を主に行いました。

3回目は、西日本豪雨の岡山県倉敷市に行きました。

こちら8月と9月に2回行きましたが、9月は、「防災リーダー養成論実習」の授業が終了した直後だったので、その実習を受講した学生が多く参加しました。主な作業は、瓦礫の撤去でした。

人の背丈をはるかに超える高さの瓦礫が集まっているところで、活動を行いました。

被災地に役立つ学生の力

これまでの災害ボランティア活動で学生が参加している様子を見て、感じたことがあります。それは、学生の力は被災地に役に立つということです。学生は、事前に学習を行って、自ら被災地に行きたいという思いがあります。そういった学生は、被災地のことを第一に考えて妥協することなく、一生懸命に活動します。

そういった活動に関しては、しっかりと被災地のことを考えたり、被災地の為になっていることが多くあります。これは学生だからということではなく、皆さんのような方々も、しっかりと意欲を持って被災地のことを考えていけば、役に立つことができると思います。

私が、初めて災害ボランティアとして行った東日本大震災の支援の時も、同様なことを感じました。その時は、私は、リーダーとして活動していたのですが、一日の作業を終え、挨拶を済まして帰ろうとした時に、お家の方が涙を目に浮かべながら手を握られて、「本当にありが

とうございました。私達だけではこんなに綺麗にできませんでした。あなた達のおかげで生きていく希望ができました。」と言われたことは、こんな経験は初めてで、今でも心に残っています。生まれて初めて、あそこまで人に感謝されました。

また、学生が被災地支援に行くことの意味・意義として、私が考えるのは、現場での現実の光景、声などを体に刻むことが出来るということです。

近年、防災教育は盛んになって、座学や映像において、災害を学ぶ機会が増えてきていると思います。災害は、必ずやってきます、あなたの身にも必ず降りかかってくる、ということをよく聞きますが、どこか他人事として捉えていることがあるかと思います。

その原因は、紙の上とか、映像でしか見たことがなく、リアリティを持てなかったということがあるのではないのでしょうか。

目、鼻、耳、口、肌で感じる被災地経験

この問題は、災害ボランティアに行くことで解決します。実際に、目の前に壊れた家があったり、車があったり、公共物が倒れていたり、瓦礫があったり、被災地の方のお話を直に聞くことができたり、今自分が立っている所で亡くなった人がいるという話を聞いたり、目で、鼻で、耳で、口で、肌で被災地を感じる経験は、被災地に行かないとできないことです。

また、被災地にいらっしゃる方は、皆さん本気です。必死です。誰も遊び半分だったり、いい加減なことだったりはありません。被災された方は、勿論ですが、ボランティアさんに関しても一緒です。みんなが必死に本気で考えている現場に行くことは、とても貴重な経験だと、私は思います。実際に、災害ボランティアに参加した学生が書いたレポートにも表れています。これまでのことを踏まえて、本日のテーマである、地域の防災力を高める為には、災害ボランティア経験が、非常に有効だと私は考えています。

今、お住まいの地域で大きな災害が起こった時、動ける人間はどれだけいますか。被災地を肌で感じたことがある人が多い地域と少ない地域、どちらが災害に強い地域と言えるでしょうか。

こういった経験を学生の時にできることは、とても貴重な経験になると、私は思います。

以上のことを踏まえて、これからも当研究所では、災害ボランティアに学生派遣を行っていくつもりです。

「クラウドファンディング」

ここで、少し宣伝になってしまいますが、お手元にパンフレットをお配りしております。「クラウドファンディング」を利用して、来年度の学生ボランティアに係る資金集めを予定しております。「クラウドファンディング」は、インターネットを通して、自分の活動や夢を発信するこ

とで、思いに共感した人や活動を応援したいと思ってくれる人たちを募る仕組みになっています。

今回のプロジェクトは、災害ボランティアに参加を希望する学生が、全員被災地に行けるようにする取り組みとなっております。これは、今年の4月1日から募集を開始しますので、ご関心のある方は、チラシの右下にある、検索は「国士舘大学レディーフォー」と書いてあるところを、WEBに打ち込んでいただいて、一度検索していただければと思います。詳しいことは、そちらのページに書いてあります。

本日紹介した、災害ボランティアに関することは、防災・救急救助総合研究所のパンフレットの3ページと4ページにありますので、後程お時間がありましたらご覧ください。

以上で、私の発表を終わります。

ご清聴、ありがとうございました。

被災者と災害ボランティア双方を経験して

千賀 嘉子

(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科4年)



司会

それでは、千賀さん、よろしくお願いします。

千賀

国士舘大学体育学部スポーツ医科学科4年の千賀嘉子と申します。

私は、東日本大震災を、被災者として経験し、そして、学生として災害ボランティアに参加した経験から、直接感じたことを報告させていただきます。

行ってわかる現地の事

災害ボランティア活動に参加した動機は、二つあります。

一つは、東日本大震災で多くの支援をいただいたので、その恩返しです。被災者を経験しているからこそ、自分にしかできない支援があるのではないかと思います。参加しました。

二つ目は、将来、防災や災害救護に関わっ

ていきたいと考えていたからです。

実際に参加したボランティア活動は、2018年（平成30年）7月の西日本豪雨と、島根県西部地震です。現地に行ってみることが数多くありました。

東日本大震災が起こった時、私は中学生でした。仙台の自宅で被災しました。こちらが住んでいた仙台の自宅の様子です。自宅は全壊の認定を受けました。左の写真は、屋根瓦が落ちたので自分たちで、屋根に上りブルーシートを張り、ブルーシートが飛ばないように紐で括り付け補強した写真です。こちらは屋根から、ブルーシートが飛ばないように紐で括り付ける作業の状況です。

右の写真は、自宅の至る所に大きな亀裂が入り、自宅が右に傾いて沈んでしまったことが分かるものです。このような状態で、自宅に住むことが困難だったので、近くの親戚の家に約一ヵ月間、17名で暮らしていました。両親の実家が、南三陸町志津川で、私も小さい頃住んでいました。多くの親戚が住んでいるので、仙台に引っ越した後も、頻繁に訪れていました。

こちらは、発災直後の南三陸町の志津川の様子です。発災直後、父は、仙台の自宅から一人で南三陸町に祖父や祖母、兄弟を助けに行ったときに撮った写真です。手前が、元々父の実家があった場所です。祖父や祖母は、奥の高台に逃げて何とか助かりました。私も、発災から10日後、実際に訪れました。慣れ親しんだ場所のはずなのに、何か目印を探さないと、自分がどこにいるのか分からないくらい町は変わってていました。被災者として感じたことが、三つあります。

被災者として感じた三つのこと

一つは、家族単位での自助の格差です。

私の家族は、家族内に若い力が多くありました。ですので、家の補強や食料の調達など、自分たちですることができました。水や食料を貰いに行っても、人数分しか貰えませんし、長時間並ばなければいけません。

このことは、高齢の方の世帯や、小さなお子様がいる世帯では、とても難しいことなのではないかと、感じました。

二つ目は、ストレスの共有が難しいことです。

学校が始まってからも、友達と震災について話すことは、ほとんどありませんでした。周りの全員が被災者で、家族や親戚が亡くなっている人も多くいたので、迂闊に話題にはできない雰囲気だったからです。

ですので、自分の抱えているものを外に出すことが、とても難しかったのです。

三つ目は、先行きが分からないことへの不安です。

発災直後は、命さえあればよかったと思っていましたが、時間が経つにつれ、見通しがつかないため、これからの生活に不安がどんどん大きくなっていきました。

この写真は、私が島根県の被災地でボランティア活動をした際に撮った写真です。ボランティア活動では、具体的に、泥出し、家財の搬出、家具の移動、屋根の補強などを行いました。私たちの今までのボランティア活動の経験をもとに様々なことを想定し準備を行いましたが、現地に行ってみることが多く、それぞれの災害で求められるものは違うのだと改めて感じました。

災害ボランティア経験で感じた二つのこと

災害ボランティアを経験して、感じた事が二つあります。

一つは、被災者は、自分の要望を言いにくいということです。

こんなことを頼んだら申し訳ないとか、他の家の方が大変だからとか、遠慮をして助けを求めません。特に、地方の方だと、ご近所との関係を気にする方が多いので、さらに、その傾向が強いと感じました。

二つ目は、ニーズの掴み方です。掲示板や回覧板などで、ボランティアの活動のことは知られていましたが、具体的に何をどこまでやってくれるのか分からなかった、という声が数多

くありました。

このことから、具体的な活動内容を示すとともに、直接被災者の方々からニーズを開ける仕組みづくりが必要だと感じました。

若い人が若い人に伝えていくことの大切さ

私が、この被災者と、ボランティア活動双方を経験し、伝えたいことは、若い人が若い人に伝えていくことの大切さです。

大学時代に、高校生向けの防災教育の中で、私自身の被災の経験を話す機会がありました。話す前までは、防災なんて……と、どこか他人

事のように聞いていた高校生が、私の実体験を話すことで、話を聞く姿勢が、一瞬にして変わりました。

災害が起こり、復興の為に一番必要となってくるのは若い力です。その若い力を持った人たちに強く伝えていくのは、私達若者の役割です。

4月から、私は日本赤十字社に勤務します。これから先、日本赤十字社で、この経験を深め、高めていき、私自身の人生に活かしていきたいと考えています。

本日は、ありがとうございました。

防災教育を受講して感じたこと

徳元 菜摘

(国土館大学政経学部政治行政学科1年)



司会

続きまして、徳元さんには、防災教育を受講して、何を感じたか、その感想を発表して頂きます。

徳元さん、どうぞよろしくお願いします。

徳元

国土館大学政経学部政治行政学科1年の徳元

菜摘です。

私は、昨年、「防災リーダー養成論」と「防災リーダー養成論実習」の2つの授業を受講しました。受講しようと思ったきっかけは、2つの授業を履修すると「防災士」の受験資格が取得できるからです。また、災害の多い日本で防災の知識を身につけることは、自分の身を守ることにも繋がるし、自分の周りの人を助けることができるのではないと思ったからです。

いつも持ち歩く鞆と、持ち物

この写真は、いつも私が持ち歩いている鞆と、持ち物の写真です。左が、友達と遊ぶ時、右が、大学に行くときです。私は荷物が重くなるのが嫌で、外出する時は、いつも小さい鞆に、お財布と携帯、リップクリームだけを入れて外出します。

学校に行くときは、プラスでノートとペンケースを入れて行きます。

「防災リーダー養成論」

しかし、「防災リーダー養成論」の講義を受

けて、先生が、災害は、いつ起こるか分からないから外出する時も、備えが必要だと聞いたのですが、外出時に災害にあったら備えが何もないことに、気付きました。

先生が鞆に常備していると良いと言っていた物は、倒れた人に人工呼吸をする為のシートや、大きな音の出る笛、携帯が長時間使えるようにするためのモバイルバッテリーなどでした。

備えも人によって違うから、自分にとって必要な物を備えるのがよいと言っていたので、普段の生活に使えるバッテリーや、絆創膏、ウェットティッシュ、薬などを鞆に入れ、常に持ち歩くようになりました。

「防災リーダー養成論」は、毎回の授業で先生が変わり、これまでに起きた日本の災害の特徴や、地震のメカニズム、災害に対する備えなどを中心に講義が進められました。この写真は、私たちが「防災リーダー養成論」の授業を受けているところです。受講人数がすごく多い授業だったのですが、講義をしてくださった先生方が現場を実際に見て、私たちに話してくれることが多かったので、災害をリアルに感じる事ができ、興味を持って勉強に取り組むことが出来ました。

「防災リーダー養成論実習」

この写真は、「防災リーダー養成論実習」の応急手当の仕方を習っている写真です。「防災リーダー養成論実習」は、3日間の集中授業で行われたのですが、初対面の人と朝から晩まで過ごすので、想像よりも大変でした。

実習の内容は、座学もありましたが、AEDを使って心肺蘇生法を習ったり、実際に日本赤十字社の方達と、災害が起きたことを想定して、防災訓練を行ったりと、身体を使うことが多い授業でした。

避難所運営ゲーム（HUG）

実習中は、使える水が制限されたので、お風呂に入らず、トイレは水が流れないことを想定

し、簡易のものを使いました。実習は夏だったので、汗もかくし、シャワーが使えないことが本当に辛かったです。

実習の中で、私が一番印象に残ったのは、避難所運営ゲーム（HUG）をグループ皆でやったことです。避難者の年齢や性別、国籍など、それぞれが抱える事情が書かれたカードを避難所の体育館や教室に見立てた平面図に、どれだけ適切に配置できるか、また、避難所で起きる様々な出来事にどう対処していくか、これらを、模擬体験するゲームです。

様々な方が生活する場を求めてやってくるので、そういった方達をどうやって狭い体育館に適切に配置するのか悩みました。自分の家に帰れない状態になっているだけでも、不安になるのに、他人と生活するのは被災した方にとって、ものすごくストレスだと思ったので、一人一人が生活しやすいように、一生懸命考えました。

しかし、被災した方が一気に来たことで、避難所が人で溢れ、配置が追い付かず気づいた時には、体育館の中を歩く通路を作ることを忘れていました。

お母さん方の、全く違った避難所完成

私は別の機会に、小学生の子供のいるお母さん方が、同じゲームをしているのを見せていただく機会があったのです。

しかし、自分達とは全く違った、避難所が完成していて驚きました。

自分達とお母さん達の違いは、色んなところにありました。自分達が作った避難所は、通路と生活する場の境がないのに対し、お母さん方は、通路をしっかりと作っていました。

また、自分達の方は、避難所に受け入れる人の数が多いのに対し、お母さん方は、自宅で生活できそうな人は受け入れず、本当に助けが必要な人だけの避難所を作っていました。

その他にも、自分達は、女性や子供への配慮が足りないのに対し、お母さん方は、授乳スペースや女性更衣室の設置をしていました。また、

自分達はプライベートな空間がなく落ち着けるスペースがないのに対し、お母さん方は、布等でプライベートに気を配り、皆でおしゃべりできる場を作っていました。

避難所運営をゲームとして体験することで、自分の住んでいる地域が被害にあった時、自分が、どうゆうふう防災に役立てるのか、考えるきっかけとなりました。また、自分の住んでいる街でも、災害にあう前に、街の人皆で考えながら、避難所運営を計画していたら、いざとなった時、パニックを最小限に抑えることができるのではないのかと思いました。

様々な経験が出来た防災教育

防災教育を学んで、様々な経験をすることが

できました。

「防災リーダー養成論実習」では、一日お風呂に入れず、使える水を制限されることが、これだけストレスになるのかを感じました。また、今まで知らなかった防災の知識を得ることで、防災に興味がわき、身近に考えることができました。

防災について学ぶことで、自分や自分の周りの人を守る可能性も高まるし、いざ本当に災害が起きたときに、正しい選択が可能になるのではないかと思いました。私は、防災教育を自分の専門分野である、地方自治や行政の立場から学びを深め、将来に活かしていきたいと思っています。

ありがとうございました。

パネルディスカッション

コーディネーター 山崎 登

(国土舘大学防災・救急救助総合研究所 教授)

コーディネーター

本学で、防災を担当しております、山崎と申します。

NHK で、1 年半ほど前まで、自然災害と防災担当の解説委員をしておりました。かれこれ 30 年少しになると思います。

全国の災害現場に行って、室崎先生のような



専門家の方々、会場にいらっしゃる防災に詳しい皆さんに、お話をお伺いしながら、今後の防災に活かす教訓は、何なのだろうか、というようなことを、考えてきました。

今日のテーマは、「地域の防災力を高めるには」です。

災害の被害を減らすには、地域の防災力が大事だということは、随分いろんな人がおっしゃるようになりましたけれども、それでは、その内実を高めていくには、実効性を高めていくには、どうしたらいいのか。

これについては、まだまだ、議論が足りないと思っています。今日は皆さんと一緒に、考えて行きたいと思っています。

それでは、パネリストの皆さんに、今日のテーマに即して、自己紹介をして頂きます。室崎先生には、基調講演をして頂きましたので、室崎先生を除いて、お願いしたいと思います。

それでは、安藤さんから。

あんどうりす（アウトドア防災ガイド）

安藤

皆さん、こんにちは。



よろしくお願いします。アウトドア防災ガイドのあんどうりす（安藤リス）です。

私は、阪神・淡路大震災（平成7年）取材した経験があって、その後、アウトドアの世界に入りました。すぐ防災の活動を始めたわけではないのです。

2003年に、東京に引っ越してきて、子どもが生まれたことをきっかけに、周りのママに、私、防災をやってみようと言ったのがきっかけでした。そうして、このような防災の発信をするようになりました。

今は、年間150回ぐらいは、講演しています。私が話すというより、地域の皆さんに、いろいろお会いする機会が多いので、地域の皆さんのお声をたくさん聴いている、ということで、今日、参加させていただきました。

よろしくお願いします。

コーディネーター

それでは、工藤さん

工藤 誠（世田谷区危機管理室 室長）

工藤

世田谷区の工藤です。よろしく、お願いします。

堅い話で恐縮です。昨年から、安全・安心の地域づくりをしていました。代表の方、地域の方に、ご参加いただき、本当に、心からありがとうございます。

また、国士館大学様には、世田谷区との災害時の協力協定の締結をありがとうございます。

私は、都の職員ですが、24年前の阪神・淡路大震災の時、神戸市の支援を



しました。また、8年前の東日本大震災では、南三陸町で、さらに、3年前の熊本地震では、熊本市で、区の職員派遣として参加した経験があります。

私の職種は、土木ですが、業務が危機管理室なので、1年目ですが、一生懸命頑張っています。

世田谷区の災害関係のお話をさせていたきます。

昨年度は、台風21号、24号により、雨というよりも風ですが、秒速40m近い数字が出まして、木の倒木とかが、複数件発生しました。

また、8月のゲリラ豪雨では、たった30分ですが、111mmの雨が降り、300件ほどの浸水被害を受けました。40年間務めていますが、これまで経験したことがないことでした。

先ほど基調講演の先生のお話にもありましたが、大阪でも、風速60mの風が吹き、今後も続くであろうというお話がありました。

我々としみしても、それを考慮して、災害時の地震につきましては、東日本大震災以降、震度5以上はありませんが、先生のお話にもありましたけれども、政府の発表では、今後30年以内には、かなり高い確率で、襲ってくる。

区としみしても、様々な計画を立案しているところです。計画・訓練を日々行っております。

今日は、よろしく、お願いいたします。

コーディネーター

それでは月村さん。

月村 雅一（若林町会広報担当）

月村

私は、国士舘大学の地元の若林町会の広報担



当と、若林1丁目防災ネットワーク事務局長をしている月村と申します。

地域デビューをして17年。当初から、防災活動に参加し、また、ほかの分野でも、様々な取り組みをして

きました。

今日は、自身の防災の取り組みと若林町会の地域防災力向上への取り組みについて、お話をしたいと思っています。

私どもの地域は、人口が19,470人、世帯数11,330で、大規模な町会なのです。実際に、防災活動をしていても、どこまで浸透しているのか、分からないところもあり、その辺も含めて、頑張っていきたいと思っています。

私は、東日本大震災の時に、被災地でボランティア活動をしました。その時に、実際に、被災地の現場を見ないと、防災をやっていると言えないのではないかとということで、ボランティアをサポートしながら、人の話、被災地の姿をこの目に焼き付けてきました。

よろしく、お願いいたします。

コーディネーター

最後に、月ヶ瀬さん。

月ヶ瀬恭子（国士舘大学防災・救急救助総合研究所 講師）

月ヶ瀬

皆さん、こんにちは。

今回のシンポジウムの主催元であります、国士舘大学防災・救急救助総合研究所で講師をしております、月ヶ瀬恭子と申します。私自身は、救急救命士として、医療のバックグラウンドを持っております。

国士舘大学で学び、そしていま、教員という立場で、働かせていただいています。本学には、毎年3,200名近くの学生が入学をしてきて、ほぼ同じ数の学生が卒業していきます。

多くの若い力を、防災という観点から、地域にどうやって返していくか。どういう形で地域と連携していくか。とても大事な部分ではないかと思っています。

現在、全学を挙げて、防災教育に力を入れている状況ですので、我々の取り組みを含めて、紹介させて頂きたいと思っています。

よろしく、お願いいたします。

コーディネーター

議論を始めるにあたって、世田谷区がどんなリスクを抱えているのか、というあたりから話を始めたいと思います。

まず、工藤さん。世田谷区の防災対策として、この地区でどのような災害を想定して、どのように備えようとしているのか。

そのあたりから、お話しをお願いします。

工藤

先ほども、少し触れましたが、世田谷区では、各自治体に、地域防災計画があります。この計画の中には、被害想定があって、東京湾北部で、マグニチュード7.3の地震の発生を想定しています。

世田谷区では、一番影響が出るだろうということで、震度6強の地震が、区内全体の66%を占め、残りの34%が震度6弱になっています。

そして、時間帯です。冬の夕方6時、風速8m、夕方ですから、ご飯時で、なおかつ、寒いこともあって、被害が拡大するだろうと考えています。

また、人的な被害は、死者が655名、負傷者

が、7,500 名を想定しています。建物の被害につきましては、全壊が6,000 棟、地震による火災は、22,000 棟、避難所の生活者が、157,000 名という数字を設けております。

この被害想定のもとに、さまざまな対策と計画マニュアルを作っています。

例えば、避難所の運営マニュアルです。世田谷区には各出張所があり、まちづくりセンターは、27 か所ございます。そこでは、各地区で地区防災計画を、それぞれ区民の皆様が主になって作っています。

そして世田谷区も、地域の方も、その計画に基づいて訓練、見直しを行っています。

世田谷区では、各町会で「防災士」取得を希望される方には、支援しております。そして、それぞれの計画の見直し点検も、行っているところです。

コーディネーター

ありがとうございます。

月ヶ瀬さん、若い力を防災に活かすと言われましたけれども、今の被害想定を聞いて、学生の安全を守りながら活かさないといけない、その辺を含めてどうですか。

月ヶ瀬

我々は、防災士を養成していることもあって、「防災リーダー養成論」「防災リーダー養成論実習」という授業をしています。

さらに、その前に、全新生 3,200 名を対象に「防災総合基礎教育」を、毎年 4 月に、実施しています。

その中では、誰かのために手を差し伸べる前に、まず自分自身の命、身を守ることが何よりも大事だという教育をしています。

自分自身の安全を守った上で、対応するのが、大前提だと思いますので、入学した最初に、防災に触れる機会を、基礎的な教育をしています。

コーディネーター

月村さん。

大変広いエリアの自主防災組織を纏めていらっしゃるのですが、今の被害想定をお聞きになって、どんな感想をもって、どんな取り組みをしているのか。教えて頂けますか。

月村

被害想定を見ると、どうしようもないのが、率直な感想です。

国や東京都、世田谷区の被害想定は、参考とを考えていて、わが地域の本当の被害とは何か、これは、考えたくありません。

実際に想定通り、または、それ以上の規模で大地震が起こった場合、どの程度の被害が起きるのか。また、地域のどこで発災するかが、重要です。

災害に強い地域づくりのために、「防災まちづくり」に取り組んできました。

平成 7 年から平成 20 年の間に、地域のタウンウォッチングをして、地域の脆弱な地盤や危険箇所、木密（木造密集）地域などをチェックして、地図に書き入れ、課題や問題点を抽出して、それを提言書にまとめました。

あとは、高い防災意識をはぐくむため、専門の講師を招いての各種のテーマで、防災セミナーを、年 3 回程度開催しています。

次に、国士舘大学との「地域連携総合防災訓練」は、重要だと思っています。

消防署の同時多発発災対応型訓練とも、一味違う訓練です。

模擬傷病者の救出救助、応急手当、搬送、応急救護所での医療トリアージを含む訓練を 5 年前からおこなっています。

国士舘大学の学生は、「防災リーダー養成論実習」の授業を行なって参加しています。そこで、若林町会としては、大学と地域の連携ができるということが、防災資源だと思っております。

地域側の参加者は 70 名程度、警察、消防、小田急シティーバス、世田谷信用金庫、若林町

会関係は、町会員、日赤奉仕団の分団、若林小PTA などの方々が、参加しています。

去年は、梅丘町会からも、何人かご参加いただきました。男女を問わず高齢者、壮年、青年、学生が、一緒に共同で活動することは心強く、理想的な訓練形態だと思っています。

着実に地域としても、地域防災力の向上になっていると思います。

世田谷区は、医療救護所が20ヶ所なので非常に少ないと、私どもは思っておりまして、若林地域だけではなく、近隣地域も含めて、活用できる災害時の医療救護所を国士舘大学に開設して頂けるとい、これも一つの私どもの防災的な財産ではないかと思っております。

日赤と国士舘大学が災害協定を結んで、応急救護所を立ち上げてくれることは、本当にありがたいと、思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。

安藤さん、いろいろなところで講演をなさっているそうですが、首都直下地震の被害想定に備えるため、地元の取り組み、大学の取り組みを聞いて、どんな感想をお持ちになりましたか。

安藤

若林地区は、頑張っていますよね。皆さんのところは、どうですか。

私は、世田谷の児童館で講演させていただきましたが、震度6強とか震度6弱と言ってもピンとこない人は、たくさんいます。

阪神・淡路大震災を体験した時、激震でいきなり揺れるので、体を動かせないのです。

多くの方は、地震が起きた時、何かできると思っているのですが、揺れたら何もできません。そのことは、共通理解して頂ければと思っています。

静岡で講演すると、静岡では、震度7で想定しているのですが、2009年に、震度6弱の地震が起きました。

その時、皆さんは、なんて考えたか知ってい

ますか。

多くの方に聞くと、揺れている最中に、東海地震が来た、南海トラフ地震が来たと思ったのですが、しかし、揺れている最中、たいしたことないと思った人は、震度6弱で結構います。

実際に、2009年に、起こったことを知らない人も多くて、大阪北部地震と同じ大きさだったのですが、震度7で想定していたから、6弱だったら、家具の転倒防止止めなどの対策をしていたので、震度6では、大丈夫だということがあります。

世田谷区も、地域に密着した対策を取られると、生き残れる人が出るといいと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

多くの人が、首都直下地震の被害想定を見て、東京の南部の直下でマグニチュード7.3が起きると思っているように思いますが、あれは、あそこで必ず地震が起きると国が言っているのではないのです。

そんな科学の力は、今の地震学には、ありません。

首都圏の19ヶ所で、マグニチュード7.3の地震を起こしてみたら、一番被害が大きかったから、それを中心に発表しているのです。

都庁の直下でも、霞が関の直下でも、南部でも、やってみたら、南部が、一番被害が大きかったので、代表して南部を震源地として被害想定を出しているのです。

マグニチュード7.3の地震だと、世田谷区で震度6強、震度6弱の想定になっています。

しかし、地震は、世田谷区の真下で起きても、おかしくないのです。今の地震の科学には、それぐらいの実力しかないことを踏まえたうえで、首都直下地震に、どう備えたらいいのか。

室崎先生、お願いします。

室崎

山崎さんの話しにもありましたが、地震の科学は、まだまだ未熟です。自然の方がもっと奥

深くて、人間の知恵では、想定出来ないことが、たくさんあります。

だから、どこで起きるかも、よくわからない。同じ揺れの地震が起きても、多種多様です。

例えば、大阪の北部地震は、部分的には、震度6弱、5強が出ていますが、家は、壊れていません。

でも中を見ると、家具とかは、全部倒れています。地震の同じ震度でも、周期によって、被害が違います。

大阪北部地震は、被害が少なかったかという、日本の損害保険の損害額でいうと、一番大きいのは、東日本大震災です。その次が、熊本地震で、三番目が、大阪北部地震です。

家の中の財産が、被害を受けているので、その支払額が、とても大きいからです。

被害は、波の周期だとか、下からの波なのか、横からの波なのか、その特性で違います。

結論から言うと、被害想定は、誤差が大きく、建物が壊れたり、津波が来る高さは、倍、半分の誤差です。津波は2mかもしれないし、1mかもしれないし、4mかもしれません。家屋の全壊率が、20%かもしれないし、10%かもしれないし、40%かもしれません。

火事が起きて、何人死ぬかとか、経済被害がどうなるかとか、社会的なことにかかっている、一ケタ以上の誤差があります。

火災では2万棟かもしれないし、20万棟かもしれません。阪神・淡路大震災の時には、7,000棟が燃えました。火事で死んだ人は500人です。

阪神・淡路大震災の時は、風も強くなって、ゆっくり燃えたので、7,000棟で500人死んでいます。2万棟燃えたら、死者が600何人と言っていたんですが、関東大震災では、10万人亡くなっています。

だから、それはそれで、幅があるので、死者が少ないかもしれないし、火事で1万人死ぬかもしれません。

それぐらい幅があります。

まさに、科学の未熟さで、それが想定外とか、そういう言葉になって、使われているので、幅

があります。災害のこともあるし、もっとラッキーなこともある。

幅があるのだ、ということを実感する。我々は、正しく収めると言っています。

首都直下地震では、三つのポイントがあります。

一番目です。首都圏は、高度な機能が集中していて、人口も多くて、いろいろな産業があります。日本の中核機能は、全部、首都圏に集中しています。集中しているところが、被害を受けると、機能障害を受けることになります。

阪神・淡路大震災と違って、そのことを、頭に入れておかないといけない。

二番目です。東京は、木造家屋の密集地域が数多くあります。関東大震災の時と、今の東京を比較してみると、世田谷区、渋谷区、中野区、三鷹市などは、木造家屋が延々と続いている超高層密集地帯です。

関東大震災に比べて、安全に見えて、実は、とても危険な状況になっています。

三番目です。超高層ビルは、安全だと思っているでしょう。しかし、とても地震に弱いのです。

壊れなくても、エレベーターが止まり、水道が止まり、上下するだけでも、大変です。阪神・淡路大震災の時も、木造家屋が燃えたという人がいますが、出火件数は、マンションの方が、圧倒的に多かったのです。

火災の件数は、コンロの数に比例するので、マンションは、面積が広いので、コンロがたくさんあります。

それで、マンションは、火災が多かったのです。

超高層ビルは、造るときに防災対策として、非常エレベーターとか、防火扉とか、スプリングクラーを付けることで、日本の超高層ビルの建設は、認められました。

しかし、スプリングクラーも、非常エレベーターも、防火扉も、地震に対して耐震装置がないので、何の保証もありません。

燃えて逃げ遅れて、なくなった方もいるの

で、マンションで、火事が起きると、防火区間と言って、広がらないようになっているのですが、煙突のように燃え上がった時、タワーリングインフェルノのようになるかもしれません。

超近代的な、超高層ビル社会のリスクが、新たに加わったことも、頭に入れておかないといけないと思います。

結論です。恐れなさすぎるのもいけないけれど、恐れすぎてもいけない。

東京は火の海になるよとか、恐れすぎてもいけない。先ほどの誤差があるということは、人間の力で、社会的な奴は、倍になる、けた違いだといったのですが、人間の力の強い、弱いで、倍になったり、半分になったり、一ケタ違う、ということは、火災は、起きて困るのであれば、起こさなければいい。

それは、人間の力でできます。

超高層ビルは、簡単で、超高層ビルの中に、自衛消防隊を作っておいて、バケツで消せば、火事は広がらない。

そういう意味でいうと、防げる。誤差が大きいということは、人間の力でいくらかでも少なくできることなのです。先ほど、世田谷で、火事が起きれば、2万棟と言いましたが、起きないようにするのは、簡単だと思います。

火事を起こさないようにすれば、火の海になることもないし、死者も出ることは、ありません。

そういう風に、誤差が大きいということとは、頑張れる余地があるということなので、コミュニティの存在感がある。

誤差はありますが、あるけれども、頑張れば減らすことができる。

恐れすぎではいけない、自信をもって迎えることが大事だと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

災害には、それぞれ特徴があります。地震の特徴は、何かと言うと、いきなり起きることです。

地震の対策は、事前にしておくことが全てです。

そのへん、安藤さんお得意ですね。

安藤

火事の話しが出ました。

阪神・淡路大震災の時は、漏電火災も多かったので、家が崩れないようにすることがとても大事です。それから、家の中のことでいえば、家具の転倒防止をすることが、地震対策になります。皆さんは、していますよね。

さっき、静岡の話しをしましたが、静岡では、いまだに家具を固定していない人がいるのですかと、質問が出ました。

それぐらい、固定が当たり前のような感覚になっています。すごいなあと思っています。

固定しろ、固定しろと言っても、できないんだけど。

家は賃貸なので、という声が多かった。

私も、賃貸だから、固定したら、原状回復しないといけないから、出来ない。

原状回復について、法律を調べてみたら、ガイドラインなのですね。

ガイドラインを調べてみると、クーラーは借りている人でも、穴をあけて付けても、いいのです。

なんで、クーラーはいいのか、と言うと、クーラーは常識だから、穴をあけていい。

だったら、防災も、みんな常識だと言っているのだから、穴をあけても、原状回復義務は免除になるのではないかな。

午前中、港区で、講演しました。港区の物件は、原状回復は、免除されていました。

原状回復は、免除のことを言ったら、ほかのところも、どんどんやってくれて、東京都の昭島市でも、三重県の日市、香川県観音寺市、どんどん広がっています。

私が講演した時、吹聴して回っているからだと思います。

また、講演だけではなく、ドットコムで記事も書きます。

皆さんは、「旭化成のヘーベルハウス」を知っていますか。あそこが、賃貸住宅で、原状回復義務を免除の、賃貸住宅を作ると決めました。

もう、常識になりつつあります。

ですから、静岡のように、家具を固定しないなんて、おかしい。

賃貸住宅でも、家具の固定ができるように、広がっていけばいいなあと、私は思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

月村さん、町会としての事前の備えは、何かありますか。

月村

耐震不燃化で言いますと、大災害への備えにやりすぎはない、と思っています。

家具やキッチンなどの転倒防止、固定はきちんとやっておくのは、あたりまえのことです。

住宅の筋交い耐震補強も大事です。世田谷区が推進していますので、若林町会のほとんどの地域は、東京都の推進する不燃化特区です。

大地震発災後は、広域的にスーパー、コンビニなどの従来の物流システムは、停止するか、破壊されます。

物流が復旧するまでの間は、緊急支援物資が来ない限り、「都会の中の食糧難」が、必ず確実に起きると思っています。

東日本大震災のボランティアの時、3ヶ月後に宮城県気仙沼の被災者宅にお邪魔した時のことです。

家は無事なので足りない時は、避難所に食べ物をもらいに行っているとのことでした。都会では、避難所に行けば、食べ物があると、多くの人は思っています。

しかし、収容人員も1,400人程度なので、行政や町会が、十分な食料備蓄をすることは、現実問題として、難しいと思います。

そこで、縁故疎開以外は、自宅でのライフラインなし生活に対応する備蓄も含めた、在宅避難の準備をすることが、肝心です。

平成26年ごろから、若林町会では、在宅避難のススメを住民に周知していこうと、動き始めました。

チラシに記事を書いたり、回覧したりしました。

区の若林三軒茶屋地区防災塾でも取り上げていただき、平成28年度に、パンフレットを作り、全戸配布を進めました。

事前の備え、食料や水の備蓄を前提に、自分の家のライフラインが止まっても住める状態なら、在宅で復旧復興を目指しましょうと促すパンフレットです。まだまだ浸透していませんが、繰り返し説明して、この考えを浸透させることが大事だ、と思います。

あとは、防災倉庫ですが、町内に9ヶ所あります。若林町会では、住民の命を守るため防災倉庫と様々な非常用資機材装備を増強してきました。

代表的なものは、火災消火に備えて、D型ポンプ、街頭スタンドパイプ、救出救助用にレスキュー工具セット、ジャッキ、担架、チェーンソー、地域内の連絡用としてデジタル無線機などです。

災害時、被害が大きくなる可能性のある木密（木造密集）地域は、若林町会にも、多く存在します。

その対応策として、20年くらい前から1～5丁目の防災ネットワークごとに、出前街かど防災教室を、繰り返し行っております。

出前街かど防災教室は、都内でも先進的な取り組みとして取り上げられております。さらに、木密地域防災対策をテーマにした、東京都防災学習セミナーも、実施しています。

コーディネーター

ありがとうございました。

工藤さん。

被害想定の中に幅がある、その幅は、事前の準備とか、対策で小さくできるというお話がありました。世田谷区としては、どんな取り組みをしておられますか。

工藤

住まいの安全ということで、自分の身は自分で守る。

阪神・淡路大震災のデータを見ましても、ご自身、ご家族など、自助で助かった部分が、3割ほどあります。

世田谷区としましては、皆さんの家の家具の転倒防止をして頂き、併せて、建物ですが、昭和56年以前の旧耐震構造の建物の補強をして頂く。阪神・淡路大震災以降に、耐震基準が変わっています。

世田谷区では建物の耐震に向けたチェックとか、設計、工事費の補助等の制度も行っています。

併せて、転倒防止の補助もしています。建物の改修には、数百万の費用を要するので、なかなか進んでいない状況です。しかし、それを補うために、ベッド回りだとか、自分だけは守れるシェルターの補助制度なども、進めています。

コーディネーター

ありがとうございました。

月ヶ瀬さんどうですか。

事前の備えということで、何かありますか。

月ヶ瀬

先ほど、徳元学生の発表にもあったと思いますが、授業の中で、災害はいつ起こるかわからないので、最低限、常に持ち歩きながら備えるもののリスト（78-79ページ参照）や、北海道の地震もそうですが、夜中、寝ている時に起こった場合は、何もできないので、自分の寝ている場所、特に、寝室だけでも、家具の固定をするようにと、授業の中では、話しております。

大学として今後、考えていかなければいけないのは、こうです。

新入生が一人暮らしをする場合に、親御さんが、どういう基準で住まいを決めているのか。私自身が、気になっているところです。

経済的な側面から、安いところを選ぶ方が多いのではなかろうかと、思います。

しかし、家イコール身を守るものになるので、耐震は大丈夫だろうか。どういうところに建っているのか。水害になったとき、そこは、どんな状況なのかとか、そういったところも、授業の中で教えないといけないと、個人的には思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。

事前に備えると言っても、地震の発生そのものを止めることは、出来ません。発災した後どうするか、とても大事なことだと思います。

最近の災害の被災地を見ていて、気づくのは、関連死が多いことです。関連死は、地震そのものでは、助かるのですが、その後、持病が悪化したり、ストレスがたまったりとか、エコミークラス症候群になったりして亡くなる方が数多くいます。

つまり、避難生活の中で亡くなられる方のほうが、家が潰れて死ぬ方や、土砂に埋もれて死ぬ方よりも、最近は多いのです。

避難所生活のあり方をどうするか。最大の課題だと思っています。

安藤さん、如何ですか。

安藤

世田谷区は、在宅避難ですが、しかし、避難所へ行かなければならない方は、避難所へ行きます。

そのとき、関連死が多いと言っていました。熊本地震では、直接死は50人、関連死は250名ぐらいだと言っています。

私がすごくショックだったのが、生まれたばかりの赤ちゃんが、関連死で亡くなったことです。

避難所に行こうと思ったが、いけないので車中泊をされて、お母さんが感染症に罹って、生まれたばかりの赤ちゃんが感染症で亡くなっています。

新生児の赤ちゃんまで亡くすのかと、すごくショックでした。

日本の避難所は、阪神・淡路大震災から変わっていません。

国際基準である難民支援のためのスフィア基準というのがあります。避難所などで暮らす人のために、定められた基準です。このスフィア基準を皆さんは、聞かれたことがありますか。人道支援のための基準ですが、NHK でもありました。

女性のトイレは、NHK では、男性の3倍にしろ、と言っていました。スフィア基準は、トイレの基準だと思っている人もいますが、一人ひとりを大切に作る基準です。

内閣府の基準の中に、こうあります。生理用品を配ったりするのに、男性の意見ばかりでもだめで、女性だけの意見でもだめで、少女、少年の意見を聴けと書いています。

少女が、こんな生理用品の配り方できないですよ。まだまだ、日本は、我慢、絆、根性、なので制度が追い付いていかなければならないと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

月村さんどうですか。地域で避難所をどうするか。

月村

若林町会では、避難所運営の2つの項目を、平成24年に具体的に準備しました。

それは、避難所運営訓練の時にみんなで話し合っ「若小避難所生活ルール」を制定し、「女性、子どもにも配慮した若小避難所避難スペース配置図」をベースで作成しました。

先ほど、安藤さんからふれられていたスフィア基準のお話で、トイレの男女設置比1:3は、配置図に落とし込んであります。

これらによって、避難所に、被災者が殺到したときに、運営側として、どこに、様々な要配慮者も含めて収容するか、その場所を、決めて無かったとか、右往左往することが、少なくなるでしょう。

ご来場の皆様の地域も、ぜひカスタムメイドで作っててください。

地域の中で、避難所の存在は、被災者の生活拠点、これが第一義ですが、もっといろいろな機能が想定されます。

地域には、在宅避難の被災者が大勢います。避難所は、地域支援の機能が重要です。

災害関連情報の拠点、地域支援の拠点、物資支援の拠点、復旧復興の拠点などです。

具体的には、地域内の公園に、災害情報提供掲示板が設置されました。あとは、町会広報として、災害時は、町会掲示板約70ヶ所に、災害情報提供のために、活用する計画です。

地域内外のボランティアによる家の片付け、生活の介助、災害ゴミの片付けなどなどや、在宅避難者への支援物資の配付、その他いろいろあります。

若林地域の災害時の課題や解決の努力ということで言うと、一つは、防災マップです。

平成24年に、従来の防災マップでは、消火器、消火栓、防火水槽、防災倉庫などの掲載でした。

これらだけでは、災害時の実践的なマップとはいえない。よりきめ細かい項目、井戸、D型、B型ポンプ、街頭スタンドパイプ、コンビニなどを付け加えた防災・減災マップを作成し、配布しました。

もう一つは、平成25年に、わかばやし防災減災塾活動を行いました。

コーディネーター

ありがとうございました。

月ヶ瀬さんは、どうですか。

月ヶ瀬

国士舘大学は、門がありませんので、どなたでも入ってこられます。

そういう点で、大学の顔も、二つに分かれると思います。

昼間は、たくさんの学生が学内にいるので、地域の方と協力して、地域を守ることができず。

夜間であるとか、今の時期のように、長期休業期間の場合には、学生が学内にいないので、たくさんの人が大学に避難して来られた時に、大学の職員で頑張って、皆さんのケアをしなくてはいけないことになります。

そういった意味でも、我々学内の教職員が、避難所運営をこうしようとか、一緒に学ぶ機会も、ここ数年で増えているので、とてもいい機会だと、思っています。

そこに、なおかつ、地域の方たちと一緒に学ぶ機会が出来ればと思っていますし、そういったものを、今後増やしていきたいと思っています。

コーディネーター

工藤さん、区としてはどうですか。

避難生活についての、考え方とか、取り組みについて、進んでいますか。

工藤

先ほど紹介して頂いたように、役所なので、さまざまな計画とか、マニュアルは作っています。

避難所運営マニュアルは、平成30年に作りました。

世田谷は、72地区ありますので、それぞれの町会単位で、どなたがリーダーになるとか、トイレはどうするのか、役割を担当することになっています。

東日本大震災もそうですが、避難所で女性・子供の被害が何ヵ所か起きております。そういった防止をするための対応を検討しています。

そして、ボランティアですが、方針としては、国士舘大学さんが、学生ボランティアの拠点になって、サテライトや各避難所に連絡要員を派遣して、そこでニーズを取って大学に連絡をしていただくようなプログラムもあります。

生きたものにするために、総務省、区の職員も、一生懸命やっておりますので、地域の方、大学関係の方との連携をさらに進めていくため

の、計画を作っているところです。

コーディネーター

ありがとうございました。

地域の防災力について、皆さんで話を進めてきましたが、今後に向けて、こういった取り組みをして行ったらいいのか、どんな課題があるのかに話を移したいと思います。

どなたからいきましょうか。月ヶ瀬さんから順番に、室崎先生まで、お話を伺いましょうか。

月ヶ瀬

国士舘大学では、防災士の育成に力を入れています。ただ、防災士はあくまでも資格で、防災士の資格を持ったうえで、それぞれの専門の分野で活躍して頂きたいと思っています。

例えば、建築の分野で防災に係る研究を、外国語の分野では、外国人の方に情報の提供の仕方をどうするか、防災をベースにそれぞれの分野において、地域の人達のために、何ができるか、大学教育として、やっていく必要があると思っています。

この取り組みは、大学だけではなくて、地域の行政も、地域の住民の方々も、さまざまな活動をするうえで協力をしてやっていかないとはいえないと思っています。

そして、私たちが積極的に地域に出向いて活動することが、大事だと思います。最近は依頼を受け、外に出ていくこともありますが、私たちの方からも、地域に出て行って、一緒に何かやりませんか、というような取り組みができたらと思っています。

コーディネーター

それでは、月村さん。

月村

近年、防災において“レジリエンス”ということが言われ出しました。レジリエンスとは、強靱なこと、回復力が高いこと、素早いこと、防災資源（人・もの・環境）が豊かなこととさ

れています。

若林町会は、近年レジリエンスなまちをめざしております。行政に頼らない、自分たちで考え、自分たちで守る町づくりです。

昭和 63 年に、防犯防火部を、2つの部に分け、防災に備えることに力を入れるべきという危機意識から、防災部が発足しました。

防災の空白地帯をつくらないという目的で、1～5丁目の防災ネットワークを作り、活動を重ねてきました。防災活動だけが防災力の強化になるかと言うと、そうではありません。

若林の場合は、人と人との関係を日常的に作るため、祭や盆踊り、敬老会などの行事を地域の諸団体が合同で運営しています。これも、レジリエンスの一つといえるのではないのでしょうか。

一握りの人が知っているのではだめで、地域全体が、防災意識が高い状態にしていくことを目指していきます。

また、今、毎年やっている「若林小学校防災授業」、「街かど防災教室」、「防災セミナー」など、継続は力です。

それらを続けながら、課題に対する対策も、一つ一つ解決をめざしていきたくと思っています。

次に、想定以上の壊滅的な被害、想定程度の被害、被害は軽微だが、ダメージの大きいエリアや、住宅が存在する被害。

これら、被害想定3つのシナリオを描いて、シミュレーション訓練をすることや、地震防災タイムラインを作成し、周知徹底することを準備していかなければならないと思っています。

防災活動が、レベルダウンしないこと、退化させないこと、浸透し充実していくことを目指しています。

若林地域版「発災から復旧・復興までの防災対応タイムラインチャート」をつくって、より立体的な対策を備えていきたいと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

工藤さん。

工藤

毎年継続していくことと併せて、自助、共助が、必要になりますので、それも行っていきます。

そして、備蓄等ですが、できれば1週間分を用意してくださいと、世田谷区ではご案内しています。

それをして頂ければ、先ほどの避難所に集中する、しないの問題がありましたが、在宅避難など課題はありますが、まず自らということで、最低、3日間は自力で何とかして頂きたいというのが、改めての願いです。

また、地域の人材育成ということで、数年前から防災士の資格を希望される方には、助成金も用意させて頂いております。

避難所では、女性の被害を防ぐ視点の下に運営をするべきだろうということで、防災女性リーダー育成の研修を進めています。

その方々が卒業されて、地域に広げていくような人材育成プログラムも、進めています。

我々、都の職員も、大学と同じですが、職員教育も行っています。

私は、災害担当ですから、日々災害計画ということで、今日みたいに、シンポジウムにも、接する機会がありますが、他の職員は、通常業務があります。

それでも、年1回ぐらいは、防災訓練を行っています。

あとは関係機関ですが、自衛隊、消防、警察、等々のライフライン、そちらとの連携も、具体的に進めないといけないと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、安藤さん。

安藤

いろいろなところが、横に繋がるのが、意外と少なかったりします。

たとえば、行政は地域と、大学も地域と繋がっています。だけど企業と、うまく繋がっていないところが、あります。

企業は、力を持っています。

北上市に北良ガスという会社があります。ガスボンベを運ばないといけないので、絶対に被災してはだめだということで、ガスで動く車や、車の中に蛇口を付けて、空気中の水を分解してシャワーが出る車を作ったりする会社です。

大船渡市で講演した時、北上市の方が来て、北上市で防災講座を開催したいのですが、北上市は盛り上がっていないのです。

行政の人も、同じようなことをおっしゃるので、ガス会社を紹介しました。そうすると、ガス会社が行政の人と繋がってくださって、地域防災のイベントを、みなさんと行いました。

その時、ママたちが、会社に来たのですが、赤ちゃん用のトイレがなかったため、赤ちゃん用のトイレを新設しました。

それから輪が広がって、地域が子育てしやすい雰囲気になっていきました。

防災に取り組めば、みんな幸せになるような雰囲気になるので、いいことだと思っています。

大塚製薬さんのこともありましたし、もっと企業を巻き込んでいただければと思います。

例えば、イタリアでは、避難所にキッチンカーがやってきて、プロのシェフが、1時間に1,000食作ってくれます。

みんなで料理を作るよりも、プロをみんなで集めましょうとか、世田谷は、面白いところがたくさんあるので、区長さんと繋がるのもいいのかなぁと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、シンポジウムの締めめの発言を、室崎さんをお願いします。

室崎

気が付いたことを、いくつかお話ししたいと思います。

一点目です。行政と地域のコミュニティの関係をどうすればいいのか。単に、自助対共助対公助の分担ではなく、行政と地域が一緒になってやっていくという関係性がとても重要です。それは、学校の生徒と先生の関係と同じだと思います。

先生は行政で、生徒は地域コミュニティの一人ひとりの地域住民です。家具の転倒防止をなさい、自分の命は自分で守ってください、宿題を押し付けるとか、それでは、生徒の力を引き出すことはできません。

こどもが宿題を自分の力で出来るように、後ろから背中を押したり、アドバイスをしたり、サポートをしたり、そこの先生の役割が、とても重要です。

行政は、生徒の横に座って、一緒に考えながら、答えを出していくプロセスが必要です。そこに、自助と共助と公助は、どう連携していくのか、コミュニティの連携は、とても重要で、地域の防災力を高めるという意味では、行政の役割は、とても大きいと思います。

二点目です。これも同じことですが、私の個人の意見が、かなり入っていますが、自分の命は自分で守れという前に、みんなの命はみんなで守ることの方が、ずっと重要だと思います。

地域に障害者のおじいさん、おばあさん、赤ちゃん、防災対策ができない人、経済的にも貧しい人、その人たちのことも含めて、みんなで考えて、みんなで命を守っていくことが、地域防災力の原点になると思います。

さっきの小学校の話でも、生徒と生徒が、それぞれのいいところをお互いがサポートし合いながら、協力できるようになる関係性がとても重要です。

企業も防災士も、いろいろな得意技をうまく連携プレイが出来るようになる仕組みづくりが重要だと思います。

そういうことと言うと、世田谷区も進んでいますが、参加した人が、みんなでみんなの命を守るということが出来ないといけません。

一部の人だけの協力では、うまくいかないの

で、みんなで守る発想が大事です。

自分だけが安全だったらいいという考えでは、地域の安全は守れません。

みんなで助け合うことが出来るようなコミュニティを作り、互いに支え合い、気を使い合い、家具の転倒防止は、私がしてあげるよ、というようなコミュニティの輪が広がっていくようになることが、ポイントです。

三点目です。これは、各論ですが、いろいろな対策の最後のキーワードはどこにあるかと言うと、それぞれの家の耐震補強だと思っています。

世田谷区で在宅避難が実現できるためには、耐震補強が出来て在宅避難だ、と思います。

自分の家が倒壊すると、在宅避難はできません。バケツリレーで消すことも、耐震補強が出来て、はじめて消火活動ができるし、耐震補強が出来て、はじめて広域避難が出来ます。

そういう意味で言うと、全ての根幹は、耐震補強になるので、お金の問題もありますが、一軒一軒の家を安全にするための耐震補強をするのは、大きな取り組みの中心だと思っています。

それをしておけば、初期消火も出来て、火事も抑えられます。避難所に来る人もぐっと抑えられます。

避難所へ行かないようにするには、どうしたらいいか。

耐震補強をコミュニティぐるみで進めることを考えて頂けると、ありがたいと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

皆さんと一緒に、地域の防災力強化、どうしたらいいのか考えてきましたが、ここで会場の方からも、発言をお願いします。

学生

先生方、今日は貴重なお話ありがとうございました。国士舘大学1年の夏川幸二です。

先日、私たちも「防災リーダー養成論実習」

で、避難所運営ゲームなどをやって、難所運営が長期化するとトイレの問題が、より深刻化することに気づいたのです。

先ほど若林町会の対策の中に、トイレ対策があったのですが、具体的には、こういった対策をされていますか。



コーディネーター

月村さん、お答えいただいてもいいでしょうか。

月村

トイレに関しては、セミナーを開催したこともあります。

「日本トイレ研究所」の代表理事を招いてセミナーを開催した時、話の中で、戸建てとマンションでは、対策が違います。特に、マンションの自宅で被災した時、トイレを使用しないでくださいと、広報誌を活用して周知しています。

マンションでは、トイレで流してしまうと、保険が適用出来ないこともあり、マンション全体でトイレを使った場合、傷がついている個所を確認しないしていると、あとで莫大なコストがかかることもあります。

あとは、個人でトイレ消臭剤などをためて頂くことも大事ということで、広報活動をしています。

高いトイレも売っていますが、レジ袋をたくさん用意しておくことも大事だ、と思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

他によろしいでしょうか。もうお一人だけ。

NPO 法人アラスキッチンカー協会

私は、NPO 法人アラスキッチンカー協会のもので、食文化会議にも、所属しています。

先ほど、安藤さんから、お話がありましたが、ケイタリングでウナギを出しているところもあります。

今年の12月、他のNPOの方と協力して、大型の炊き出しシミュレーションをやりたいということになり、世田谷区が協力して頂けると聞いたものですから、お願いしました。

世田谷区は、150社ぐらいの企業と契約していて、どういうものが、その時に出てくるのか、それが分かれば、その食材を利用して料理のシミュレーションが出来ます。

先日、答えが返ってきました、世田谷区で、食を提供してくれる企業は大塚製薬、米穀商、世田谷商連の3社だけなのです。大塚製薬さんも、カレーの具とかで、シミュレーションに出せるかどうか分からないとのことでした。

実際、キッチンカーは、すごく動けて、東日本大震災の時、チームを組んで、炊き出しに行った経験があります。

イベントなどをすると、企業から食材を提供頂けると、何百人分の炊き出しシミュレーションをすることが出来ます。

世田谷区さんが、食材を提供して頂ける企業を引き入れて頂き、人数分用意していただけると、我々も。全体でいろいろなことが出来るので、是非、よろしくお願いしたいと思います。

コーディネーター

ありがとうございました。

そろそろ終わりの時間も近づいてきましたので、今日のパネルディスカッションの最後に、パネリストの皆さんに、今日の感想、または、提言を伺いたいと思います。

それでは、月ヶ瀬さんからどうぞ。

月ヶ瀬

今日は、ありがとうございました。

いろいろな立場から、「地域の防災力を高め

るには」という共通のテーマで、お話が出来たことは、とてもよかったと思います。

やはり大学として、得る期待も大きい中で、我々が力を発揮していくことも、大事だと改めて感じております。

これからも、しっかりと教育に従事し、地域と共に前を向いていける大学でありたいと思います。

ありがとうございました。

コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、月村さん。

月村

本日は、大変ありがとうございました。

いろいろ参考になることを聞かして頂き、実際に活かしていこうと思っています。

国士館大学さんとは、連携している中で、大変恩恵を受けていて、感謝をしています。

先ほど、企業との連携ということで、具体的な例として、町会が企業と防災協定を結んでいます。小田急シティーバスの営業所がありますが、そこと結んでいる協定は、いざというとき、バスを避難所にして避難者を収容して頂くという協定です。

もちろん職員の方にも、お世話して頂けると考えています。

近くに、ドン・キホーテがあり、協定を結びましたが、残念ながら4月7日に閉店するということもありました。

国士館大学との連携ということで、5年前から、防災訓練や若林小学校の防災教育もしていただいているのですが、もう一つ、国士館大学さんとは、平成21年に、協定を結んでいます。その協定は、災害時、学生に避難誘導のサポートをしていただき、若林の住民と協力して、救護活動、傷病者の搬送などを行う協定です。

その時、当時の佐伯理事長が話していたことが印象に残っています。それは、昭和20年の5月25日の東京大空襲の時に、若林も甚大な

被害を受けました。

国士館も、校舎が全焼でしたが、教職員と学生が、町の消火活動に参加して、怪我人を戸板に乗せて、上町の病院に運びました。亡くなった方もいたが、市民と心の交流が高まったことを今も忘れることができません。今日、このような防災の約束が出来たことを誇りに思います。

このように、話されたのが、印象に残っております。

国士館大学と地域の結びつきの深い縁があらと感じました。

地域の防災力を高めるというテーマですが、私たちは災害大国に住んでいるので、今日学んだことを、実際に活かしていきたいと思っています。

本日は、ありがとうございました。

コーディネーター

ありがとうございました。

では、工藤さん。

工藤

皆さん、今日はありがとうございました。

私がしみじみ感じているのは、防災はいろいろな人を繋ぐことが出来ます。世田谷区も、地域住民の皆様と、激励がございましたので、しっかりやってまいります。

危機管理室は、災害と防犯を担当しています。

残念ながら、特殊詐欺が23区の中で発生しています。

世田谷区掲示物で周知していますが、皆様におかれましても、お気を付けください。

学生さんもおられるので、家に帰ったら、おじいさん、おばあさんにも、会話等をお願いします。

もうひとつ。今日から、選抜高校野球がはじまりますが、国士館高校、皆さんと一緒に応援しましょう。

本日は、ありがとうございました。

安藤

皆さん、ありがとうございます。

私が感じているのは、防災は人を繋げることが出来る、今の時代の希望のツールだと思っています。

皆さんと、今後も防災のことをやって行けたらと、思っています。

「女性防災ネットワーク」で、最近話していることがあります。

耳の障害を持っている人を、避難所のリーダーにして頂くと、耳の悪い高齢者の人をどうすればいいのか、よく理解しています。

だから、障害をもつ人を入れると、高齢者の人にも、優しく接することが出来ます。

地域に行くと、キッチンカーを持っている人とか、いろいろなことが出来る人がいます。出来ない人も、役に立つことがあり、防災をきっかけに繋がりづくりをやっていただけならと思っています。

今後も、よろしくお願いします。

コーディネーター

ありがとうございました。

では、室崎さん。

室崎

今日は、大学の役割とか、在り方を、いろいろ考えさせていただいてありがとうございました。

防災では、土の人、水の人、風の人があります。

土の人は、自分の地域に住んでいる一般の市民の方です。

水の人は、とても大事で、そこに寄り添って、水をかけながら花を咲かせる人のことです。

風の人は、僕らみたいで適当に好きなことをしていて、まき散らす人です。

安藤さんは、素晴らしい風の人です。

防災で、一番大切なのは水の人です。

水の人は、大学から生まれてくると思っています。地域をどうやっていくかも重要ですが、将来、日本の社会に役立つリーダーを出してい

かないといけない。それは、大学のカリキュラムの問題です。

国士舘大学が、「防災リーダー養成論」「防災リーダー養成論実習」の二つの科目をされているのは、すごいことだと思います。

全ての大学が、防災リーダー育成を実践する拠点になっていただければ、ありがたいと思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

今日、皆さんに、お付き合いいただきましたけれども、私も、基調講演から、職員の発表、学生の発表、パネルディスカッションを聞いて勉強になりました。

地域の防災力は、地域の総合力だと思います。

だから、狭い考え方でとらえると、隣近所が仲よくすることが、地域の防災力だと思われがちですが、やはり、地域にいる住民も、企業も、地域に係っている自治体も、消防団も、大学も、病院も、工場も、みんなで力を合わせて、地域が、地域のことを考えることが、地域の防災力なのだと思います。

防災を永年取材してきて、ひとつだけ言えることがあります。防災訓練が賑やかなところは、お祭りも賑やかです。

地域でイベントをやっても、必ず人がきます。防火活動にも、防犯活動にも、人が集まります。

つまり、地域の活性化が、核にあるのだらうと、今日改めて痛感しました。

その中で、大学がどういう役割を果たしていけばいいのか。

今日、皆さんからいろいろなヒントを頂きましたので、防災総研のみんなと一緒に考えて、高めていければと思います。

今日は、長時間にわたって、お付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。

これで、ディスカッションを終わります。

司会

ありがとうございました。

改めて、パネリストの先生方を、ご紹介いたします。

兵庫県立大学大学院 室崎益輝教授、アウトドア防災ガイド 安藤リスさん、世田谷区危機管理室 工藤誠室長、若林町会広報担当 月村雅一様、国士舘大学防災・救急救助総合研究所 月ヶ瀬恭子専任講師、国士舘大学防災・救急救助総合研究所 山崎登教授でした。

それでは、シンポジウムの終わりにあたり、国士舘大学防災・救急救助総合研究所 杉本勝彦副所長より閉会のご挨拶を申し上げます。

閉会挨拶

杉本 勝彦

(国士舘大学防災・救急救助総合研究所 副所長)

皆さん、今日は、当防災総研のシンポジウムに多数お集まりいただきありがとうございました。

昨日は、暖かくて20度を超えたところもあり、今日は7度ということで、大変気温の差が激しいので、どうか、お体にご自愛ください。

最後に、一言付け加えさせていただきます。我が国の災害対策に関しては、「地域防災計画」が必ず、各地方自治体でつくられます。

東京都の「地域防災計画」は、マニュアルも含んでいるので、ポリュウムがあり全部読まれている人は、たぶんいないと思います。

県も作成しますが、実際に、お金を出して実行するのは、市町村です。世田谷区の場合は、世田谷区が行います。

様々な資料を提供するのは、東京都ですが、実際に活動するのは、市区町村の方々なので難しいところがあります。

今日は、地域のコミュニティが、どのように防災力をつけていくのか、ソーシャルキャピタルの一部だと思います。

本日のお話の中で、公助が遅れるとか、問題があるというお話がありました。

公助の問題点は何かと言うと、ひとつは、公平性に徹底しているということで、もう一つは、慣れていないことです。

災害が毎月のようにあったら、皆さんは慣れてきますから、自分たちで対応できるはずです。

世田谷区の場合は、東日本大震災とか、阪神・淡路大震災のような震災を受けていないため、慣れていないので、どうすればいいのかわからないところです。

さらに、もう一つの問題は、被災地の現場では、共助の中心となって働く方々が、被災者になることです。



今日、世田谷区の人がおられましたけれど、もし区の人が、具合悪くなったら、だれがやるのか、そこで問題が起こります。

そして公助に関しては、ものすごく時間がかかり、手間がかかります。公助ですから、お金はたくさん有り、しっかりした仕事をしてもらえることは間違いありません。

ただその間をつなぐのは、共助です。

このようなシンポジウムは、全国で開かれているのは、間違いないと思います。しかし、何回も、何回も、やっているかという、災害に対する指針や、基本がないということが、問題です。

災害は、全国共通で、どこでも発生します。そして、地域には、特性があります。

世田谷区だと世田谷区の特性、山梨県の町だと、その町の特性、東日本大震災では、南三陸海岸の特性があるので、一概には、言えません。

自分たちで、どうやって、地域防災力を考えていけばいいのか。

ひとつの指標として、先ほどスフィア・プロジェクトのお話が出ました。

このスフィア・プロジェクトは、難民の人達のために、人間らしく生きてもらえるには、どうしたらいいかという指針です。

災害による被災者のための指針ではありません。

日本では、難民対応の指針もなければ、被災者のための指針もないので、スフィア・プロジェクトを読んでいただいて、いいヒントを見つけて頂ければと思います。

地域のコミュニティで防災力をつける意味でも、一度スフィア・プロジェクトを見て頂くのは、よろしいかと思います。

もう一点は、災害の話や対策を練っている時に、次は、どういう対策をしたらいいのか。どういう準備をしたらいいのか。いろいろな考え方があります。

一つの考え方として、亡くなった方、怪我をした人、倒壊した家屋等を、すべてお金に換算

してしまう考え方です。

たとえば、東日本大震災ですと、甚大な被害が出ます。それを、死亡者、家屋の損壊を、全部お金に換算してしまう。

そのお金を、次の防災費として使ってしまう。東日本大震災は、1,000年に1回ですから、次の1,000年に、返せばいいという考え方もあります。

スフィア・プロジェクトは、1度目を通していただいて、地域の防災力向上の、一つのヒントにして頂きたいと思います。

もう一つは、防災に対するお金のかけ方です。お金に換算して、何年間に返していく考えだと、ある程度の準備が出来るのではないかと考えております。

これで終わりにしたいと思います。

本当にありがとうございました。